PUELLA MAGI MADOKA MAGICA

劇場版 魔法少女まどか★マギカ × スポーツ報知

300円

【前編】始まりの物語 ／ 【後編】永遠の物語

INDEX
新房昭之総監督が語る 2 3
脚本家・虚淵玄氏直撃 4 5
テレビ版ダイジェスト 6 8 10
おぎやはぎ流楽しみ方 14 15
声優インタビュー 16～27
アスリートがおすすめ 28 29
主題歌アーティスト 30 31

まどか★マギカ特別号
300円
報知新聞
報知新聞社
東京本社03-5479-1111
〒108-8485港区港南4-6-49
大阪本社06-7732-2311
〒531-8558北区野崎町5-9
読売大阪ビル
http://hochi.yomiuri.co.jp
日刊©報知新聞社2012
昭和21年12月14日
第三種郵便物認可
4910852321627 00286

魔法少女とスポーツ新聞がまさかのコラボ!!

原画・山村洋貴 仕上・シャフト

映画館でお会いできたら、それはとってもうれしいなぁと、思ってしまうのでした

購読のお申し込みはフリーダイヤル0120・16・4341 読売新聞販売店でも受け付けています

©Magica Quartet／Aniplex・Madoka Movie Project

フィギュアメーカー
グッドスマイルカンパニー勤務
ミカタンブログ 出張版!!
http://ameblo.jp/gsc-mikatan/

2012-10-16 0:00:00

劇場版「魔法少女まどか★マギカ 後編」公開記念! アルティメットまどかが「ねんどろいど」と「figma(フィグマ)」で商品化決!!

テーマ：ねんどろいど figma

みなさま、こんにちは! 「グッドスマイルカンパニー」というフィギュアメーカーに勤務しているミカタンこと斉藤と申します。(･∀･)/
普段はインターネッツの中で活動しているのですが、なんとスポーツ報知さんの紙面に掲載していただくことになりました。
嬉しい気持ちと同時に、キーボードを打つ手も汗まみれです。gkbrです。どうか生暖かい気持ちでご覧いただけますと嬉しいです。(((ﾟДﾟ)))
…という訳で、今回ご紹介するのはこちらの商品です!

まずは「ねんどろいど アルティメットまどか」!

な、なんというラブリーさ…!!
高さ約10cmに可愛らしくデフォルメされたその姿は、眺めるだけで癒されること間違いなしです!(´∀`)

純白の衣装にはパール塗装が施され、スカート内側の宇宙空間も細やかに表現されています。
可愛らしさと上品さを兼ね備えた、絶妙なバランスであります!!

デフォルメフィギュアは全体のまとまり感が命ですが、造形と彩色に調整を重ねているねんどろいど、さすがのクオリティーですな!! (*´ω･)b

弓は、展開前・後の2種類付属します!

弓の上部にご注目ください!
「魔法の弓」は、つぼみ状態と開いた状態の2種類をご用意しました!

その他ポーズを変えられる腕パーツはもちろん、みんな大好きねんどろジョイントで、ツインテール・首・腰・腕・足をぴょこぴょこと動かしてあげることができますよー。
小さい体をがんばって動かしているアルティメットまどかさんを見ていると、明日もがんばろうと思えます…!

魔法陣のエフェクトパーツで劇中を再現!

矢を放つ際、宇宙空間へ出現した魔法陣を足元に浮かべられるようにいたしました! しっかりグラデーションが入っていて、とてもキレイ…!
figma同様、笑顔パーツも付属です!

続いて「figma アルティメットまどか」!

いかがですかこの神々しさ…!!
figmaは手のひらサイズのフィギュアなのですが、髪やスカートの造形が繊細に造り込まれていて、実物を手にした時の感動と満足感がとても高いです!

三段に重なったボリュームたっぷりのスカート、その内側に展開された宇宙空間、胸元や絶対領域の細やかな造形、クリアパーツの透き通った羽など、アルティメットまどかさんに相応しく、見どころ盛りだくさんな逸品です。
すごいぜfigma…!!ヽ(ﾟ∀ﾟ)ﾉ ｳｰ

こんな感じで色々なポーズをとらせることができちゃいます!

figmaはフル可動なので、ガシガシと動かして遊んでいただくことができちゃいます。ボディだけではなく、羽やスカート、さらに髪の毛にも可動が仕込まれておるのですよー!
右の画像は、ふんわりと降り立つイメージでポーズをつけてみました!くっ…美しいですな…!!｡･ﾟ･(ﾉ∀`)･ﾟ･｡
こうして皆様の指先で、アルティメットまどかさんが完成するという訳です!

オプションパーツもたくさん!

女神のように微笑んでいる表情パーツや、アニメでも印象的な「魔法の弓」が付属しています。
小物と思えない精度の高さですので、お手元に届いた際はぜひチェックしてみてくださいね!(･ω･)ゞ

なんと!まどか役の「悠木 碧」さんからコメントがががが…!!Σ(ﾟ∀ﾟ*)

「遂に宇宙の理が手のひらサイズに！笑
小さくなっても二頭身になっても、アルティメットの神々しさは変わらず…
よかったら貴方の傍で、お側で祈らせてください(*´-`*)」
——悠木 碧——

それではみなさま、またインターネッツの中でお会いいたしましょう! 平日はほとんど毎日更新しておりますよ!(･∀･)/

「ねんどろいど アルティメットまどか」全高:約100mm 専用台座付属 2013年4月発売予定
■販売・発売元：株式会社グッドスマイルカンパニー http://www.goodsmile.jp
「figma アルティメットまどか」全高:約125mm 専用台座付属 2013年2月発売予定
■発売元：有限会社マックスファクトリー http://www.maxfactory.jp
■販売元：株式会社グッドスマイルカンパニー http://www.goodsmile.jp

©Magica Quartet／Aniplex・Madoka Partners・MBS

スペシャルインタビュー まどか☆マギカの正しい見方

新房昭之 総監督

ものすごい反響「大変驚きました」

―『魔法少女まどか☆マギカ』が社会現象と言えるほどの大きな反響を巻き起こしたことをどのように感じた？

「まったく想像もしていませんでした。もともと原作がある作品ではありませんし、また今、深夜で放送されているアニメ番組は約40～50本。その中の1本、しかもオリジナルの、まったく無名の作品として始まったわけですから、反響の大きさには大変驚きました」

―当初、どの程度まで行けば成功だと。

「具体的に言えば、DVDが2万本くらい売れれば最高だな、くらいの気持ちでした（笑い）。オリジナル作品であるということに対するプレッシャーは大きかったですね。今のテレビアニメはほとんどが原作モノですが、もし『まどか』がうまく行かなかったら"やっぱりオリジナル作品は難しいね"と受け取られかねない。そういう怖さはありました」

―深夜に放映しているアニメと、かつてゴールデンタイムに放映していたアニメとの違いは？

「例えば10秒、目を離すともう内容がわからなくなる、みたいな作品が深夜は多いですね。のんびりご飯を食べながら見る、みたいなことがほとんどない、映画を見るように見る作品が主流。そのあたりがたぶん、昔と一番違うところでしょう」

―なるほど。

「あと、1クールの作品（3か月間で放映が終了する作品）というのは意外と難しくて、途中で息切れしてしまうと、すぐに見ている方に"もういいかな"と思われてしまう。よく言っているんですが"1クール作品は、甲子園で優勝するような気持ちでやらなきゃダメ"なんです。『まどか』に限らず1クールの作品は、1話1話、絶対に面白いと思われるものをつくらなければいけない。これまで自分が関わってきた作品がすべてうまくいったかといえば、そんなことはないのですが、それくらいの気持ちでやらなければダメだと思います」

―例えば、ストーリーの展開を早くして、視聴者の興味をつなげる方法もある。

「あと重要なのは、登場するキャラクターに興味を持ってもらうことでしょうか。キャラクターを気に入ってもらいつつ、この後、どうなってしまうんだろう？と思ってもらう。それを1クールのなかで両立させるというのは、なかなか難しい。今回の『まどか』に関していえば、そこが奇跡的にうまく行ったのかな、と思います」

―『まどか』を通して、監督が伝えようと考えていたこととは？

「それほど大げさなことは考えていませんでした。続きモノで、面白いものができればいい、それくらいの気持ちです。あとは、タイトルに『魔法少女』とつけることにこだわったくらいでしょう。『魔法少女』を冠にしてはいるんだけれども、バトル（戦い）がメーンになる、そういうアクション作品になればいい。そういうところから始まった気がします」

―『魔法少女』という冠にひかれて見始めると、想像よりもハードな展開で驚かされる。

「『魔法少女』とタイトルにつけてしまったことで、逆に間口を狭めてしまったのかもしれないと思うこともあります。たしかにタイトルに『魔法少女』とつけたのは、私のこだわりだったんですが、逆に"今さら魔法少女ですか？"と思った人もいるんじゃないだろうか、と。例えば絵にしても、いわゆる美少女モノっぽい絵を見て"いつものあのパターンね"と、一歩引いてしまう人たちがいる。それと同じことですね。ただ自分としては"魔法少女"というジャンルにこだわりがあった。これまでも"魔法少女モノをやりたい"という話は何となくしていたんです。しかも、実際に作る以上は、タイトルに『魔法少女××ちゃん』とつけたかった。とはいえ、今、改めて振り返ると『まどか』は"魔法少女"というには、少し無理があったかもしれません（笑い）」

あくまで魔法少女 タイトルにこだわった

―『魔法少女』というタイトルには、やはりこだわりがあった。

「まあ、タイトルで言い切ってしまえば"魔法少女モノ"のジャンルに入るんじゃないか、と。逆に『魔法少女』とつけなかったら、ピントがボケてしまう気がしたんです。例えば『美少女戦隊』だと、また違うイメージになってしまうでしょう？ そうではなくて、あくまで魔法少女なんだ、と。あと、これは（脚本を担当した）虚淵（玄）さんが考えられた仕掛けなんですが、主人公のまどかが一向に魔法少女にならない。最初は主人公がなかなか魔法少女にならないので"おかしいな、ヘンだな"と思う。で、第6話あたりまで来ると"ああ、これは魔法少女になってはいけない話なんだな"と気づくわけです。そこは新しかったのかな、と思いますね」

―監督という立場で作品を作りあげていくなかで、特に注意を払った部分は？

「もしこうしたジャンルの作品を、『まどか』で初めて手がけることになっていたら、少し戸惑っていたかもしれません。というのも『まどか』はキャラクターがかわいらしい一方で、ストーリー展開が非常にハードです。自分はやっぱり、ハードなお話であればリアルなキャラクターでやった方が、見ている人にも伝わりやすいんじゃないか、と思ってしまうんです。これまではそう考えていたんですが、例えばPCの美少女ゲームには、アニメっぽい絵でハードな展開をするものもある。そういうものを見ると"なるほど、今の若い人はリアルなキャラクターじゃなくても大丈夫なのかもしれない"と思えた。それを、ほかの作品を監督する中で感じていた、というのはあります」

―やはり、かわいいキャラクターでハードな話が展開するのは、難しい？

「例えば私たちは、キャラクター原案をやっていただいた蒼樹うめさんの『ひだまりスケッチ』という作品もアニメ化しています。本来、蒼樹さんのキャラクターは『ひだまりスケッチ』の世界の方がしっくりくるキャラクターなんです。でも『まどか』の場合は、ストーリーの展開上、本来はキャラクターがやらないような表情をつけなければならない。あるいは、画面の構図もそうですね。そういう意味で最初"本当にうまくいくだろうか"とドキドキしたところはあります」

―監督にとっても、チャレンジだった？

役者の演技と同じ キャラクターも成長

「そこでうまく、接着剤の役割を果たしてくれたのが、劇団イヌカレーさんにやっていただいた"魔女空間"のビジュアルです。蒼樹さんのキャラクターとハードなお話をうまくくっつける役割を果たしただけではなく、作品自体をもう一、二段階、押し上げてくれた。そう思います。みなさん、個性的なクリエイターの方たちばかりなので、できるだけ個性をつぶさずに、かといってバラけすぎないように作っていければ、というのはありましたね。あと、思わぬ反響があったのはキュゥべえですね。虚淵さんともよく話していたんですが、あのキャラクターの価値観があれだけ世間に受けるとは思ってもみませんでした」

―いよいよ劇場版が公開。テレビシリーズの時から予想していた？

「まったく思ってもみませんでした。放映が終わってしばらくした頃に、続編を作ろうという話になったんです。そのときに虚淵さんが提出したプロットを見て、（アニプレックスのプロデューサーの）岩上（敦宏）さんが"映画をやろう"と」

―今回の劇場版制作するにあたって、どういったコンセプトで臨んだ？

「基本的には、一気に見ることができる形にしたいと思っていました。テレビは毎週放映するものですが、そうではなくて、一気に最初から最後まで見て、楽しめるものにする。あとは、映画になったからといって"いかにも映画だよ"というモノにはしたくなかった。これまでテレビシリーズを見てくれていた人が違和感を感じないようなモノにしたかった、というのは大きいですね。だから劇場版では普通、オープニングみたいなものはつけないんですけど、今回はあえてつけています」

―映像面で大きく変わったところは？

「前編は、背景が変わっています。というのも実は、テレビシリーズの途中で背景を担当していた会社が変わってしまったんです。そうすると、どうしても―特に今回の映画のように、一気に通して見る形にすると、違和感が出てしまうので、改めて描き直してもらっています。あと、スクリーンのサイズが大きくなるわけですから、ロング（引き）の絵に関してはもう一度、細かく描き直していますね」

―そのほかに変えたところは？

「アフレコをやり直しているので、そのあたりの役者さんたちの芝居も見どころです。テレビシリーズのときは、この後の展開がどうなるか、わからないままに演技をしてもらっていたんですが、今回はすべて、最初から最後まで内容がわかった上でお芝居をしてもらっています。そうなるとやっぱり、映画という1本の流れのなかで、どう盛り上げていくのか、役者の方々が考えて演じている。そういう部分で、テレビシリーズとはまた違った印象になるんじゃないかと思います」

―アフレコをやり直すにあたって、注文したことは？

「まったく、なにも注文することはありませんでした。あえていえば、たぶん音響監督かどなたかに"もう1回か2回、同じ世界をループした感じが欲しい"というお願いをしたくらいでしょうか。でもやっぱり、それぞれの役者さんのなかで役が完全にできあがってますから、私からあえて何か言うようなことはありませんでした」

―劇場版のポスターでは、まどかたちが少し成長したような印象。

「役者さんの演技と同じように、絵もきっと、そうなってるんじゃないでしょうか。最後のエンディングまで、一度描ききっているわけですから、そういう気分は乗っかっているかな、と。最初の頃のデザインとは徐々に離れてきてはいるんですけれども、キャラクターが育つというのは、こういうことなんだろうな、と思います。例えばマンガにしてもそうですよね。第1巻と第50巻では、キャラクターの絵が変わってくる。あれと同じように"キャラが成長したんだな"とか"みんなの手に馴染んできたんだな"と思ってもらえればいいかな、と」

―では最後に、意気込みを。

「タイトルは知っているんだけども、まだ見たことがないという人に"あっ、これか"と思って、見ていただけるとうれしいです。今回の前後編を見て、一度総括していただいた上で、次の完全新作に臨んでいただけるのが、一番の理想かな、と。実は後編の最後に予告編がついているのですが、そこには新作のセリフも入っています。それを見ていただければ、きっと"えーっ!?"と思ってもらえるんじゃないでしょうか（笑い）」

劇場版「魔法少女まどか☆マギカ」御覧いただき有り難うございます 新房昭之

◆新房 昭之（しんぼう・あきゆき）1961年9月27日、福島県生まれ。51歳。「魔法少女まどか☆マギカ」をはじめ、「さよなら絶望先生」、「ひだまりスケッチ」、「荒川アンダー ザ ブリッジ」など数々のアニメを世に送り出した。

©Magica Quartet／Aniplex・Madoka Movie Project

脚本家 虚淵玄 スペシャルインタ

UROBUCHI GEN SPECIAL INTERVIEW

おさらいのつもりで作った総集編が全然別物になったのはうれしい誤算でした

—脚本を書くことになったきっかけは？

「アニプレックスの岩上（敦宏プロデューサー）さんから、新房（昭之）さん、蒼樹うめさんのキャラクター原案で魔法少女ものをやりたいとお誘いいただきました。自分の『Fate／Zero』という小説を岩上さんが読んだ上で、このテイストでいってほしいと。蒼樹さんのかわいいキャラクターだけど、毎回キャラクターが脱落するようなバトルロイヤルものとしてシビアな魔法少女モノを作ってほしいと言われまして、顔合わせの場で大まかな構成案とプロットをお話したところOKが出たので、まとめて企画書にしました」

—新房総監督と初めて組んだ作品。

「最初は（新房総監督作品の）『魔法少女リリカルなのは』を意識すべきかと思っていましたが、見直してみると『Fate／Zero』との接点がないと思いまして、Zeroの著者だから起用された自分がなのはをもう1回やり直すのも多分違うと考えたときに、（新房総監督作品の）『コゼットの肖像』を見て、このテイストだったらいけるなあと思い、自分の中でも手応えがありました。音楽は『コゼットの肖像』で梶浦由記さんの楽曲が素晴らしかったので、もう1回お願いしましょうと。『コゼットの肖像』のおどろおどろしさ、異世界の強烈なインパクト…。そういったところで魔女の結界で戦うというのがうまくいきました」

—どういう魔法少女にしようとしたのか。

「岩上さんのオーダーに自分も面食らいました。まさか、魔法少女の仕事が回ってくるとは思いもしなかったので。ハードな路線とあったので、従来の展開にこだわってキラキラした幸せなものにしてはいけないと思いました。自分の芸風にうまく融合させていくには、少女向けの愛らしさはまず置いておいて、いわゆる変身ヒーローというベクトルから考え直していこうと。奇跡的な能力そのものに対価が伴って、その対価にある苦悩があるという王道のヒーローものに組み直して、最後の落としどころとして王道の魔法少女に持っていければいいかなと」

—キャラクターはどのようにつくったのか。

「ラフで3、4人いて、あとから出てきたのは杏子くらい。名前を決める前の段階からまどか、ほむらはいましたが、マミはいたかどうか。ラフでもらった子に名前をつけて、こんなキャラと作っていきました。最初の顔合わせの話をした段階では（キャラクター設定は）なかったと思います。主人公、ライバル系、先輩キャラみたいで3、4人くらい提案してもらって、それぞれのキャラを生かしていきましょうと。あとからさやかが出て、最後に杏子が出てきました」

—それぞれのキャラクターの立ち位置は？

「台本というか世界観の導入になったところで力尽きてしまう先輩が1人いて、主人公より先行して魔法少女になってから、その現実を知って絶望する魔法少女が1人。すべてのカギを握った上で最初は敵のように出てきて、謎だけまいていくキャラが1人という位置づけはまずありました。最後の最後で主人公が世界そのものを救済するバトルロイヤルということがあったので、ライバルとして登場する杏子もあとから追加しました」

—キャラクターを中学生に設定したのは？

「小学生が巻き込まれるにはストーリーとして無惨すぎるし、高校生はもう大人なので大人のキャラにしなくてはいけない。中学生くらいが一番中途半端な感じでいいかなと」

—中でもまどかは普通のキャラ。

「本当に普通で何の変哲もないキャラが最後に普遍的なヒーローになっていくという話にしたいなあと思っていたので、まどかの性格付けはごくごく徹底して、普通のキャラにしたいなあと思いましたね」

—キュゥべえの位置づけは

「世界観そのものを口に出して語るポジション。魔法少女ものの鉄則として、まず魔法少女たる主人公たちは作品世界そのものに愛されて、ものすごく保護されて大事にされて、彼女たちが傷つけられないことを前提のものとしてストーリーが進んでいきます。どの作品でもマスコットキャラを務めるポジションが世界観の代弁者であり案内役といいますか。主人公たちにも視聴者たちにも、異世界から来た妖精さんの導きで作品世界に入っていくのが王道のテンプレート。もしも、その存在が主人公たちに愛情を持っていない生き物だったら、一気にとんでもない話になるだろうなあと思いつきました。最終的には世界観の代弁者としてのポジションをキュゥべえからまどかが奪い取るオチをつけようとしました。魔法少女たちを愛する世界の導き手に主人公が成り代わって、王道の世界観を作って完結する話にしようというのはありました。キュゥべえの設定は必ずしも人間に味方する意思を持っているわけではない、感情すら持っていない宇宙人にしました」

異世界の強烈なインパクトそこで戦うというのがうまくいった……

◆虚淵 玄（うろぶち・げん）1972年12月20日、東京都生まれ。39歳。ニトロプラス所属の脚本家、小説家。「鬼哭街」、「沙耶の唄」といったゲームシナリオを手がける一方、アニメーション作品にも参加。魔法少女まどか☆マギカは3作目となる。

みなさんのインスピレーションの総決算としての3作目になる

—見かけはかわいい。

「当初のイメージはもっともっと愛くるしい方向でいってくれるかなと思っていました。デザイン段階では十分かわいかったのですが、演出の段階で口は動かないし目は開きっぱなしで、すごい不気味なことになりまして、逆にキャラが立ちましたよね」

—イメージ通りの映像になったのか。

「こちらのイマジネーションを完全に凌駕するものにしてくれました。魔女の設定に関しては（異空間設定の）劇団イヌカレーさんが大方盛り上げてくれていますので、新作の3作目に関しては魔女がらみの部分をイヌカレーさんに監修してもらっているくらいで、まさに共同作業という感じです。テレビ版では脚本を脱稿してからイヌカレーさんにオファーがいった形でしたが、今回はむしろイヌカレーさん側からセリフとかアイデアとかいただいて、それを自分が反映しています。あんなにも個性的な世界観にしてもらえるとは、こちらも想定外でした」

—テレビシリーズ全話を担当したのは初めて？

「頼りにできる先輩がいない現場は初めてだったので戸惑いもありましたし、意外に監督やプロデューサー側からのオーダーがなかった。あとになって、新房総監督はアニメ慣れしていない脚本家を求めていたと聞きました。脚本としてはそれなりに問題があるものだったのですが、不慣れなところをそのままセリフも変えずに映像化することによって、ちょっと一風変わった芸風になるだろうという目算が新房総監督にあったようで、さほどリテイクも入ることなく、せいぜい尺の調整ぐらいで完成稿になりました」

—書き終えた感想は？

「初めて誰にも頼らず一人でやった仕事だったので、うまくいけばアニメ脚本家としては一人前と名乗れるなあと。自分なりの卒業試験みたいな気分ではいましたし、事実ギブアップせずに書き上げられたことで、もう十分でした」

—収録には立ち会った？

「アニメの世界に連れてきてくださった（アニメーターの）板野（一郎）監督のスタンスですよね。ライターは収録に立ち会って、その段階でトラブルがあったときに対処できるよう万全の整えをしなくてはいけない。実は後から知ったのですが、脚本家さんはそんなに収録には来ないらしいのです。自分のほうが特別と言われたのですが、実際に立ち会ってよかったという状況が何度かありました。やっぱり、台本段階での誤植とか、いざ尺に収まらなかったとか、変えなきゃといった調整はやっぱり収録の場で出ます。そういった調整ができるラストチャンスなんです」

—劇場版でも立ち会ったのですか？

「劇場版に関していえば再編集なのでセリフも変わることはなかったので、何度かごあいさつにうかがったくらい。新作のときにはいないとまずいでしょうね」

—読者へメッセージを。

「テレビ版だと6時間かかりますが、映画では4時間にまとまっています。3作目は完全にテレビ版を踏まえていないとわけがわからなくなるので、それもあって先に総集編をやろうという流れになりました。本命はまさに3作目で、その前振りとして6時間見るよりは4時間版をという思惑で作ったものが、いざふたを開けてみると、演出面の見直しがものすごくてとんでもないものになりました。これはひょうたんからコマでしたね。おさらいのつもりで作った総集編が全然別物になったので、そういう意味ではうれしい誤算でした」

—テレビと劇場版の差は？

「映画では、テレビ版のように30分ごとに切って次は何だろうという待ちはありません。立て続けに見るので、引いて待たせてという緩急がないのです。それは大きい。3作目の公開は2013年と聞いていますが、気長に待っていてください。新しく続きの話になっていくので、その前にぜひとも総集編を映画館でごらんになっていただいたらと思います」

—新作はどういうものに？

「まったく構想がなかったので最初は無理ですと言いましたが、新房総監督も岩上さんもテレビで12話を作ったことで手応えというか、そこからひらめきになる部分があったみたいで、そういった話を聞いているうちに、話を広げていけばうまくいくなあという思いつきがありました。脚本を書いただけだったら自分も無理だったと思いますが、脚本に対して演出とかイヌカレーさんの美術とか新しく付加された要素が自分の想定外の材料だったので、うまく想定外の材料を集めていけばもう1本、話は作れるかなという気持ちになりました。続編になるための手がかりをくれたのは、まさに自分以外のスタッフの方々ですよね」

©Magica Quartet／Aniplex・Madoka Movie Project

—どんな展開？

「これは書き上げてみてビックリだったのですが、Kalafinaさんのテレビシリーズのエンディング曲「Magia」の歌詞を見直したら、3作目にがっつりはまるんですよね。まさにこういう話だなと。不思議なシンクロニシティというか、逆に芯がぶれなかったのでしょうね。こういうことになるべくして書いてきた話だったんだなあと。これは不思議な偶然ですよね。梶浦さんが先に書いていた歌詞が本当に3作目を予言するかのような内容だった。皆さんのインスピレーションとアイデアの総決算としての3作目となるのでは」

—原作Magica Quartetの今後は？

「むしろ広げていきたいと思います。劇場の続きも考えていまして、テレビものの2クールも構想として挙がってはいますけれど、そのためにも新しいライターを入れたいと思います。自分がいなくなったら、まどかの次がなくなってしまう。物語はクリエイターより長生きするべきだと思います。自分のあとも、まどか☆マギカを語り継いでくれる人がいてくれると思うので、そのためには自分一人で完結してはいけないと思います。プリキュアだって2人組から始まったのが、まさか5人組になるなんて誰も想像しなかった。作品は続々新しくアップデートされていって、その時代時代に即して新しく生まれ変わりながらも、人々の記憶に残るものになってほしいです。変質を恐れてはいけません」

テレビ版ダイジェスト

第1話 中2女子不思議体験 夢オチ？まどか

鹿目まどかは見滝原中学校の2年生。ある夜、不思議な夢を見た。傷だらけになりながらも、巨大な怪物と必死で戦う少女。「僕と契約して、魔法少女になってよ」。破壊された街で、まどかは白い動物のような生き物に、こう声をかけられる。

翌日、クラスに転校してきたのは、夢の中の少女とそっくりだった。なぜか、まどかのことをよく知っていた暁美ほむら。とまどうまどかに、ほむらは忠告する。「あなたは、鹿目まどかのままでいればいい。今まで通り。これからも」

親友の美樹さやかとの帰り道。謎の声に導かれるように、ビルに迷い込んだ。そこで、夢の中に出てきた生き物、キュゥべえを襲う意外な人物に出会った。

テレビ版ダイジェスト

第2話 「願い事かなえてあげる」 キュゥべえ誘惑

キュゥべえを助けた、まどかとさやかだが、全く見たこともない異空間に迷い込んでしまった。絶体絶命のピンチに現れたのは、見滝原中学校3年生の巴マミ。彼女はキュゥべえと契約した魔法少女だった。

マミの部屋に誘われた2人はキュゥべえから、魔女という存在について聞き、その魔女と闘う魔法少女になってほしいと頼まれる。「僕は君たちの願い事を何でもひとつかなえてあげる」という“契約条件”とともに。

ただ、そして命がけの戦いを続けてきたマミが2人に忠告する。「あなたたちには、どんな願いでもかなえられるチャンスがある。でも、それは死と隣り合わせ」だと。

そして2人は、マミの魔女退治に同行することになった。

テレビ版ダイジェスト

第3話 マミ熱闘

人々のために魔女を退治するマミの姿を見て、魔法少女にどんどんあこがれていく2人。とはいっても、願いごとは見つからないまま。迷っている2人は、マミになぜ魔法少女となったのか、を尋ねる。

「願い事って自分のための事柄でなきゃダメなのかな」と尋ねるさやかに、マミは冷たく言った。「他人の願いをかなえるのなら、なおのこと自分の望みをはっきりさせておかないと」

翌日、まどかとさやかは、魔女の卵を発見する。まどかはマミを呼びに走る。

そして、壮絶な戦いの末…。

テレビ版ダイジェスト

第4話 非情宣告受けていた 恭介 復帰絶望

さやかは想いを寄せる幼なじみの上条恭介のお見舞いにやって来た。天才バイオリニストと呼ばれていた恭介は、事故で「もう二度と楽器を弾くのは無理」と言われていた。

過酷な使命を実感したまどかとさやかは、魔法少女になることをあきらめる。

帰り道でまどかはほむらと出会う。魔法少女の現実を語るほむらに、まどかが返した言葉は悲しいほど優しかった。

ほむらと別れて、クラスメート・仁美を見つけたまどか。その姿を追いかけて、魔女に追い詰められる。それを救ったのは…。

©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Movie Project

登場人物

鹿目まどか
声◎悠木碧

どこにでもいる平凡な女の子。友達思いで心優しい性格の持ち主。これといった取りえのない自分に悩む中学2年生。

暁美ほむら
声◎斎藤千和

まどか達の通う中学校に転校してきたクールな性格の万能少女。魔法少女のようだが、その言動には謎が多い。

まどか→ほむら：どこかで会ったような…？
ほむら→まどか：忠告
キュゥべえ→まどか：契約しようよ！
ほむら↔キュゥべえ：契約済み？／敵意

キュゥべえ
声◎加藤英美里

「魔法少女になる」という契約と引き換えに、少女の願い事をひとつだけかなえてくれる魔法の使者。

上条恭介
声◎吉田聖子

さやかの幼なじみのクラスメート。バイオリン奏者だったが、事故が元でその道を閉ざされる。

志筑仁美
声◎新谷良子

まどかとさやかのクラスメートで、二人と大の仲良し。おしとやかで美人なお嬢様。

まどか↔仁美：親友
まどか↔さやか：親友
恭介↔さやか：幼なじみ
仁美↔さやか：親友
まどか↔マミ：先輩／後輩
キュゥべえ→さやか：契約しようよ！
キュゥべえ↔マミ：契約済み
キュゥべえ↔杏子：契約済み
さやか↔マミ：先輩／後輩
マミ↔杏子：対立？

美樹さやか
声◎喜多村英梨

まどかの親友。いつも元気で活発な性格。幼なじみの恭介の見舞いのため、病院によく顔を出している。

巴マミ
声◎水橋かおり

まどか達の通う中学校の3年生。面倒見の良いお姉さん的存在。まどか達の住む街を守る現役の魔法少女。

佐倉杏子
声◎野中藍

マミの縄張りを狙って別の街からやって来た魔法少女。自分の目的のためなら周囲の被害をもいとわない利己主義者。

劇場版魔法少女まどか☆マギカ
【MAIN STAFF】

役職	氏名
原作	Magica Quartet
総監督	新房昭之
脚本	虚淵玄（ニトロプラス）
キャラクター原案	蒼樹うめ
監督	宮本幸裕
キャラクターデザイン	岸田隆宏、谷口淳一郎
総作画監督	谷口淳一郎、山村洋貴
副監督	寺尾洋之
アクションディレクター	阿部望、神谷智大
異空間設計	劇団イヌカレー
美術監督	内藤健
美術設定	大原盛仁
色彩設計	日比野仁、滝沢いずみ
ビジュアルエフェクト	酒井基
撮影監督	江藤慎一郎
編集	松原理恵
音響監督	鶴岡陽太
音響制作	楽音舎
音楽	梶浦由記
主題歌	ClariS（前編）、Kalafina（後編）
アニメーション制作	シャフト
配給	アニプレックス

©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Movie Project

テレビ版ダイジェスト

第5話 魔法少女同士が激突
さやかVS杏子

魔法少女となってまどかと仁美を救ったさやか。願いがかなえられたことで、気持ちは晴れ晴れとしていた。「後悔とか全然ないの？」とまどかに問われ、「迷ってたことが後悔」と答える。さやかは恭介を病院の屋上へと導く。待っていたのは恭介の両親、主治医たち。恭介に愛用のバイオリンが手渡された。恭介が奏でる音色を聴きながら、さやかは幸せを実感する。その姿を街の展望台から眺めていたのは、佐倉杏子だった。使い魔を退治しようとしていたさやかと一緒にいたまどかの前に、杏子が現れる。自分のことしか考えない杏子。腹を立てたさやかと、戦闘となった。劣勢のさやか。その場に現れたのは…。

テレビ版ダイジェスト

第6話 思わずソウルジェムを…
!?まどか

さやかと杏子の戦いの場に現れたほむらは、あっという間にさやかを気絶させてしまう。警戒してその場を立ち去る杏子。

翌日、さやかとまどかは、取り逃がした使い魔の痕跡を探していた。そこで、まどかは夕べのように、再びけんかにならないよう、杏子との話し合いを求めた。ところが、「あれは、正真正銘の殺し合いだったよ」とさやか。2人の思いは少しずつ食い違っていった。

恭介に会うために、病院を訪れたさやか。しかし、恭介はもう退院していた。肩を落とすさやかの前に再び現れた杏子。再び戦う2人。そこにやって来たまどか。戦闘を止めようと思わず…。

テレビ版ダイジェスト

第7話 あたしは後悔してない
杏子激白

自らの体の真実を知ったさやかは、魔法少女となった代償の大きさを痛感し、心は揺れる。しかし、キュゥべえに「戦いの運命を受け入れてまで、君にはかなえたい望みがあったんだろう。それは間違いなく実現したじゃないか」と言われ、何も言い返せなかった。

落ち込むさやかの前に現れたのは、杏子だった。さやかを連れ出し、廃墟となった教会へと向かった。そこで、自らが魔法少女となったわけを話し始めた。「これ以上、後悔するような生き方を続けるべきじゃない」と諭した杏子のことを誤解していたと謝るさやか。しかし、「人のために祈ったことを後悔していない」と言い切る。

仁美から恭介への思いを打ち明けられたさやか。自らの置かれた境遇を思い、必死で魔女と戦う。

テレビ版ダイジェスト

第8話 どうにもならない感情
さやか涙

傷だらけになりながら、必死で魔女を切り刻むさやか。しかし、疲れ切って、まどかに体を預けた。

帰り道、雨宿りをしながら、見かねたまどかは思わず戦い方に口を出してしまう。その言葉に感情を爆発させてしまうさやか。「私のために何かしようって言うなら、まず私と同じ立場になってみなさいよ」。そう言って立ち去った。

追いかけることができないまどか。自己嫌悪を感ずるさやか。そのソウルジェムは、もはや黒く濁っていた。

あてもなく夜の街をさまようさやかを、やっと探し当てた杏子。さやかは寂しそうに言った…。

テレビ版ダイジェスト

さやかを救いたい 第9話 杏子 秘策

グリーフシードから、新たな魔女が誕生した。さやかの体を抱えながら、必死に魔女の攻撃を防いでいた杏子。そこに現れたほむ

らに手を引かれ、魔女の結界からようやく抜け出す。

さやかを探していたまどか。その前に、さやかの体を抱えた杏子とほむらの姿があった。変わり果てたさやかの姿に、泣き崩れるまどか。ほむらは、ソウルジェムの最後の秘密を語り、立ち去っていく。

その日の夜、杏子の前に現れたキュゥべえ。さやかの体を元にもどそうと、杏子はキュゥべえとの会話からひとつの可能性を見いだした。翌朝、まどかにある提案をした杏子。そして2人はある場所へ向かった。

テレビ版ダイジェスト

ひ弱な少女が実は…… 第10話 ついに明かされる ほむらの謎

転校生の名は「暁美ほむら」。奇麗な長い髪の少女は、いかにも気弱な感じで、おどお

どしながら、自己紹介していた。休み時間、次々に質問を投げかけるクラスメートに気後れしていたほむらに、保健係の少女が声をかけた。「鹿目まどか」という優しい笑顔の少女は、「ほむら」をかっこいい名前だという。

長い間の入院生活で、学力も体力もみんなについていけないほむら。その現実に落ち込みながら帰宅していたが、魔女の結界に迷い込んでしまった。そんな大ピンチのほむらの前に、2人の魔法少女が現れた…。

病院のベッドの上で目覚めたほむらの、その手の中には…。

テレビ版ダイジェスト

どうする!! ほむら 第11話 ワルプルギスの夜 見滝原接近

悲しみに暮れるまどかは、目の前に現れたキュゥべえに淡々と現実を語られて怒りを

あらわにした。そのことを理解できないキュゥべえは、人類と自分たちインキュベーターの歴史について語り始める。そして、魔法少女を必要とする理由も。

ほむらの元をたずねたまどかは、かつて杏子とほむらが話していた「ワルプルギスの夜」について問いただす。涙を流しながらまどかを抱きしめて、真実を語り始めるほむら。「お願いだから、私に守らせて」という言葉とともに。

見滝原の街には異常気象による、避難指示が出されていた。それこそが「ワルプルギスの夜」。ほむらは…。

テレビ版ダイジェスト

あまりに衝撃的な結末 最終話 まどかがついに……

ワルプルギスの夜に立ち向かって、深手を負ったほむら。その前でまどかは、重大な決意を語り始める。「ほむらちゃん、ごめんね…」

©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Movie Project

知っておきたい〝まどか☆マギカ語〟講座

★ソウルジェム

マミ「キュゥべえに選ばれた女の子が契約によって生み出す宝石よ。魔力の源であり、魔法少女であることの証でもあるの」

キュゥべえ「この石を手にした者は、魔女と戦う使命を課されるんだ」

契約によって、どんな願い事もひとつ叶えられ、魔法少女となる。魔力を使えば使うほど、濁り、汚れていく。

★魔法少女と魔女

キュゥべえ「願いから生まれるのが魔法少女だとすれば、魔女は呪いから生まれた存在だ。魔法少女が希望を振りまくように、魔女は絶望を撒き散らす。しかもその姿は普通の人間には見えないからタチが悪い。不安や猜疑心、過剰な怒りや憎しみといった負の衝動…そういう禍の種を世界にもたらしているんだ。(中略)魔女は常に結界の奥に隠れ潜んで、決して人前には姿を現さないからね」

★グリーフシード　魔女の卵。魔女消滅後に残されるひとかけらの黒い宝石。運がよければ、魔女が持ち歩いている。ソウルジェムの濁りを吸い取る役目を持つ。それによって、魔法少女が使った魔力も元通りとなる。魔女退治の見返りでもある。

キュゥべえ「また次にソウルジェムを浄化するためには、早く新しいグリーフシードを手に入れないと」

★使い魔　魔女から分裂した存在。成長すれば、分裂元と同じ魔女になる。

★魔女のくちづけ　魔女に魅入られた犠牲者であることを示す首筋の刻印。

★念話　口をつぐんだまま思うこと、念じることで会話すること。当初、まどかとさやかの場合にはキュゥべえが間で中継していた。

★ワルプルギスの夜

杏子「あたしら魔法少女にとっては最悪の強敵、超弩(ど)級の大物魔女だ」

ほむら「ただ一度具現しただけでも何千人という人が犠牲になるわ。相変わらず普通の人には見えないから、被害は地震とか、竜巻とか、そういった大災害として誤解されるだけ」

まどか☆マギカってかなりヤバい

震災の影響で中断も再開時に読売新聞全面広告

○…2011年1月から3月にかけ、TBS系列などで放送。同年3月11日の東日本大震災により、大規模災害を思わせるシーンが登場することもあって、第10～最終話の放映などを自粛。約1か月後(TBSは27時、MBSは26時40分)に未放送分を「完結編」として一挙に放映。同時に、同日の読売新聞朝刊(東京、大阪、中部など、主に放送される地域版)で「完結編放送」という全面広告が掲載され、大きな話題となった。

数々の賞を獲得

○…2011年、第15回文化庁メディア芸術祭アニメーション部門大賞を受賞した。第16回アニメーション神戸賞で作品賞(テレビ部門)、SF文学賞の第43回星雲賞(メディア部門)など、数々の賞を獲得。また「僕と契約して、○○になってよ！」は、2011年度ネット流行語大賞銅賞(3位)となった。

DVD売れまくり

○…テレビ放映終了後にDVD、ブルーレイが発売されたが、第1巻は、テレビアニメの第1週売り上げとしては、史上最多の5万3000枚。続く第2巻も第1週で5万4000枚を売り上げた。

魔女図鑑

↑薔薇園の魔女【性質】不信【手下➡の役割】造園、警戒

⬅お菓子の魔女【性質】執着【手下⬇の役割】チーズを探す

⬇鳥カゴの魔女
【性質】憤怒
【⬅手下の役割】軽薄無思慮

↑救済の魔女
【性質】慈悲

暗闇の魔女(未登場)
【性質】妄想
【手下の役割】夢

落書きの魔女(未登場)【性質】無知【手下⬅の役割】童心

⬅ハコの魔女【性質】憧憬【⬅手下の役割】運搬

犬の魔女(未登場)【性質】渇望【手下⬅の役割】インテリア

⬅影の魔女　【性質】独善
【手下⬇の役割】妄信

↑委員長の魔女【性質】傍観【手下⬅の役割】クラスメート

↑人魚の魔女【性質】恋慕【手下の役割】⬅演奏、バックダンサー⬅

⬅芸術家の魔女
【性質】虚栄
【手下⬇の役割】作品

銀の魔女【性質】自由
【手下の役割】主張

舞台装置の魔女(通称・ワルプルギスの夜)【性質】無力【手下の役割】道化役者

©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Movie Project

JUNK 木曜深夜 おぎやはぎのメガネびいき

まどか、ほむら、さやかの3声優がゲストの特別編「魔法小木おぎか☆オギダ」が歴史を変えた!!

放送開始以来初

「まどか★マギカ」パネェ！聴取率1位あざーっす!!

「魔法少女まどか☆マギカ」の影響で歴史を塗り替えたラジオ番組があった。TBSラジオで月曜から土曜の深夜1時から放送されている「JUNK」。木曜深夜の番組「おぎやはぎのメガネびいき」では、今年2月23日の放送で、まどか、ほむら、さやかの3人を招き「魔法小木おぎか☆オギダ」と称して戦闘劇を行った。するとJUNKが始まった2002年以来、初めて放送枠が聴取率で1位を獲得。おぎやはぎは「まどか☆マギカ人気を肌で感じた」と振り返る。

1・26 2・2 約1時間の熱弁がほぼ0%だった20代男性リスナー向けの大反響

―きっかけは？

やはぎ「聴取率調査で、20代の男性がまったく聴いてないことが分かったんですよ。でも20代の男は何聴くのか分からないですよね。だからリスナーに聴いてみたら候補が何個か出てきたんです」

―例えば。

やはぎ「就職活動の話がいいんじゃないとか。その中でアニメがいいんじゃないか、って出てきてそれでアニメについて、『詳しくないけど何がいいの？』って聴いたら、『まどか☆マギカ』ともう一つ来た。なんだっけ…」

おぎ「けいおん！」

やはぎ「そうそう。スタッフやいろいろな方に『どっちを見たらいい？』と聴いて回ったんですよ。そうしたら『まどか☆マギカでしょう』と言った人が2、3人いて、それで試しに見ようと思ったんです」

―その存在を知ってた？

おぎ「全く知らなかった」

やはぎ「僕も全然知らなかったですね」

―第一印象は？

やはぎ「この絵がちょっとね」

おぎ「40代の男にとってはちょっとねえ…」

やはぎ「ちょっと抵抗ありましたよ。僕はレンタルショップに借りに行った時、タイトル覚えているのに、『あれ、魔法少女…なんでしたっけ？』って、他人に頼まれたフリして借りたんですから」

―すると。

やはぎ「いざ見てしまったら、もう1話を見終わった瞬間に速攻で次を見てた。2話、3話、4話と」

1月26日の放送で、4話まで見たやはぎが「まどか☆マギカ」について約50分にわたり熱弁。大きな話題になった。

―なぜそんな長時間？

やはぎ「いや、つい時間を忘れてしゃべっちゃったんです。『タイトルで魔法少女って言ってるのに、まだ魔法少女にならないよ』って言いたくて」

おぎ「全12話って分かっている上で、4話までならないからね。もう3分の1過ぎているのに」

やはぎ「こっちが予想するのは正義の味方が出てきてさ、『ピンチになると魔法少女に変わっていろいろ解決するんだろうなあっ』て思うじゃないですか。この絵だし。でも、そんなにライトな話じゃなかったから、フフフ。『なんじゃこりゃ』って。人が死んだりダークな話なんだもん」

やはぎ「僕もまず、それにびっくりしたんです」

そして最終話まで見た、やはぎは次週放送の2月2日、再び1時間近く熱弁。またもや大きな話題となった。

やはぎ「いかに先週の自分が浅かったかを痛感したんですよ。4話ぐらいで語っちゃいけないってね。ハハハ」

―その様子を見ておぎさんも興味を持った？

おぎ「そうですね。『浅かった』とか聞くと、大どんでん返しがあるのかな？とか想像しちゃうしね。でも本当はそんな情報も欲しくないけどね。見る時は。見ながら『ここなのかな、ここなのかな』と思いながら見ちゃうから」

やはぎ「だから、そこに気を使ってしゃべってはいたんですけどね」

おぎ「それは分かりながらも『何かあるんだろうなあ』と思ってた。でも自分なりに予想してても、それを超えてきますね。このアニメは」

―最初なぜ、やはぎさんだけ見たのか？

おぎ「まあアニメだから俺はいいや、と思って。その時はラジオでやるって決まったわけじゃないし。僕は海外ドラマにはまってるから、見る暇ないし」

―番組内では説明が大変そうだった。

やはぎ「そうですよ。これラジオで（おぎを含め、見てない人に）ネタバレしないように説明するのが大変。先を言わないで説明しようとすると、すごく浅はかなことしか言えないから」

番組中にリスナーから届いたメール約2000通!!

衝撃の数字が出たのは昨年12月の聴取率調査だった。「全世代の平均値は上々だったが、10代から60代まで男女を細かく調べると、20代男性だけがほぼ0％（数字は非公表）だった」と「JUNK」の宮嵜守史プロデューサー（36）は振り返る。

やはぎが2週にわたり「まどマギ」について話した1月26日、2月2日の放送は、たちまち話題となった。リスナーがインターネットの動画サイトに音声をアップ。再生回数がそれぞれ10万回を超えた。全世代で聴取率トップとなった2月23日の「魔法小木おぎか☆オギダ」は、再生回数が数十万回単位に。宮嵜氏によると、リスナーからのメールも番組中に約2000通届いたという。

番組では聴取率を調査する10月18日の放送で特集を企画。キュゥべえ役の声優・加藤英美里さんらも出演する。

やはぎ あの悩ましい体型が好き

おぎ エロ目線じゃねえかよ

やはぎ 俺はほむら派だね

おぎ 俺はマミ先輩だから。

2・23 数十万回 動画サイトでも驚異の再生回数 伝説のオギプルギスの夜

―「我々が無事に生きているのは、まどかのお陰なんだよ」は名言。

やはぎ「あはははは。でしょ!!。これしか言いようがないと思った。何か言うと、ばれちゃうし」

おぎ「僕はずっと見ないつもりでいたんですけど、やはぎが凄い楽しそうにしゃべってくるから。これは間違いないな、と思ったんですね。そう、それで家で娘が見ているのを横からチラチラみた。3回くらい」

2人が「まどか☆マギカ」の魅力にハマったことで、TBSラジオでは聴取率を調査するスペシャルウイークで、まどか☆マギカ特集を企画。2月23日、3人の声優をゲストに招き、特別編「魔法小木おぎか☆オギダ」を放送した。

おぎ「僕が契約で『魔法小木』になって魔女『オギプルギスの夜』を倒した回ね」

やはぎ「面白かったですよ。アニメ見た後だから。声優さんが凄い人に感じてくる。あの本物の人がくる。だからこっちもテンションが違う。まどか役の悠木碧さんはスタジオで生出演してくれたので、色々と変なこと言ってくれるんですよ」

おぎ「『私もおぎかちゃんを応援してるの。みんなも応援して数字増やして』とかアドリブで言ってくれたし。大体『オギプルギスの夜』って言ってくれる自体、面白いよね」

やはぎ「声優さんは迫真の演技だし、やっぱりすごいうまい。横でおぎも声優やったけど声の質とか全然違うもん」

そして特集の回の放送が全世代の聴取率で1位を獲得。深夜枠「JUNK」がスタートした2002年以来初めての快挙だった。

やはぎ「『オギプルギスの夜』のすごさを実感しました」

おぎ「すごいなあとは思いますよね。さすが!!オギプルギス」

やはぎ「リスナーからメールが来なかったら、俺たちが知らなかったこと。いまだに知っているかどうかですね」

―リスナーの反応は？

やはぎ「今まで聞いたことない名前の方からメール来たので、新しい人が聞いてくれてるとは思いましたね」

―どこが魅力？

おぎ「何だろうねえ」

やはぎ「ストーリーとキャラ設定なんだけど、最初は絵かな。少女漫画なんだけど、戦いの時だけ急に絵が変わる。あれ格好いいでしょ」

おぎ「アートだね」

やはぎ「そう、それでこれはただの少女漫画じゃない、って感じになる。格好よくて曲も全然変わるから期待が持てるんですよね」

―徐々にハマる？

やはぎ「そう。だんだん、最初は抵抗あったこの絵がよくなってくるよね」

おぎ「この絵じゃないとダメみたいなね。ハハハハハ。この絵だから面白かったんですよ。見終わってみると」

―印象に残っているシーンは。

おぎ「マミ先輩が食べられた時は『うわぁ』ってなった」

やはぎ「そう。3話目だ。俺も、あの時『あああ!!』って声出ちゃったもん。ハハハ」

―好きなキャラは誰？

おぎ「俺はほむら派だね」

やはぎ「俺はマミ先輩だから。あの悩ましい体型が大好きだから」

おぎ「結局エロ目線じゃねえかよ」

―ほむらの良さは？

やはぎ「クールビューティでしょ。この影がある女性が男は好きなんですよ。この子は何か過去あったぞ、って感じるじゃないですか。最初はつんつんしているのにね。やっぱりキャラクター設定がうまいんですよ。大体ヒットするのって、主役喰うくらいのキャラがいるんですよ。オレは、まどかちゃんより、ほむらちゃんファンの方が多いと思うよ」

おぎ「多いだろうねえ」

やはぎ「美味しい役なんですよ。女優さんだったら、まどか役よりほむら役やりたいでしょ」

―キュゥべえをどう思った？

おぎ「キュゥべえ!! 悪い奴って分かるのが結構後半なんだよな」

やはぎ「そうそう。後半。最初はなんか使者みたいな感じなんだよね。それが面白いんだよな。凄いかわいいのに平気でひどいこと、心ないこと言ってくる」

―裏切られた感じ？

やはぎ「そうそう。でも見ているうちに、いや違うんだ。俺らとは常識が違うだけなんだ、って分かるんだけどね」

おぎ「キュゥべえも悪気があって言っているわけじゃないんだよね」

―これから見る人にメッセージを

やはぎ「本当に裏切らないから。本当に最初抵抗あるけど、だまされたと思って見るしかないよ。絶対面白いから」

―何話でハマる？

やはぎ「3話じゃない？ 俺はその頃には、はまってたよ」

おぎ「いや俺は3話じゃまだまだ。でもこの作品は間違いないよ」

◆おぎやはぎ 小木博明（1971年8月16日生まれ）、矢作兼（1971年9月11日生まれ）によるお笑いコンビ。高校時代の友人で、2人ともいったん就職後、退職して1995年にコンビ結成。2001年、M―1グランプリに出場し決勝10位。02年、同決勝4位。また「メガネが似合う男性有名人」にも2度1位に輝く。現在はそれぞれ「日本メガネ党」の党首、幹事長を自称する。

©Magica Quartet／Aniplex・Madoka Movie Project

まどかには共感してもらえる感情が詰まってる

本当にそれがかなったんだとしたら―わたしだってもう絶望する必要なんて、ない!!

悠木碧インタ♡

悩んだけど熱中

―まどか☆マギカの魅力とは?

「絵柄がふんわりかわいい感じと、シリアスでハードなストーリーのギャップが見ている人たちをドキッとさせたんじゃないかなと思います。毎回、劇的なことが起きていくので、みんなで先を予測したり、話題にしてくれたりしたんじゃないかなと思います」

―まどかはどういう少女?

「まどかには、周りの魔法少女に戦ってほしくないという気持ちと、人に任せっきりという気持ちがあったのだと思います。周りの人が、決心して戦って、ボロボロになっていくのを見ているだけで、一歩踏み出せない自分ってすごく弱いなあと思いながら、それを止めようと思っているまどかもいたりして。たとえば、電車に乗っていて、『席を譲ったほうがいいかもしれないけど、次の駅で降りたりするのなら迷惑かなあ』と考えたりするように、日常にいっぱいあふれている葛藤を、『まどか☆マギカ』はわかりやすく皆さんにお届けするために、魔法少女になるという決断を比較対象にしているのだと思います。ちょっとずつみなさんに共感していただける感情が、まどかには一杯詰まっていると思って。うじうじしていると思うかもしれないけど、自分だったらと思う時にまどかはリアルな選択をしている。みんなが持っているものを持っている普通の子で、だからこそ受け入れてもらえたのかなあと思います」

―それぞれの魔法少女の性格とは?

「まどかは自分で決断できない子なので、さやかちゃんはぐいぐい引っ張ってくれる。マミさんはあこがれの魔法少女でかっこよくて、わたしもそういうふうになれたらいいなあと。テレビで見ていた魔法少女を体現しているような。

ほむらちゃんは最初、転校生ですごく怖い印象だったけど、絶対仲良くなれると確信できた。杏子ちゃんは彼女の中身がわかるまですごく時間がかかるし、そんなに深くからむわけじゃないですけれど、いわゆる不良とまじめみたいな組み合わせだったりして。義理人情に厚いんだなあというところもあって」

―もし、キュゥべえに会ったら契約する?

「絶対にしないですね。引っ捕らえて動物園に売ります(笑い)。でも、いいやつなのかなあとも思います。今の資本主義社会の中で人が目指している究極値というか、すべての存在の利益を数字で計算できて、理性的に切り捨てるものは切り捨てて利益を挙げていくという…。あのときああすればよかったなあとかあると思うけど、完ぺきで、あれが正義というところが人間からしてみると悔しい部分だったりする。まどかから見たら悪者に見えていると思います。客観的にみたら何にも間違ったことは言っていないし、正義か悪かといったら…。それが正義だと思いたくないのが、まどかの素敵なところかなと思うし、それが共感してもらえたから受け入れてもらえたキャラクターだと思います。でもキュゥべえが正しいって広まらなくてよかった。反感の対象になってくれてよかったです」

―キュゥべえと契約する?
絶対にしないですね(笑い)

―まどかの家族に共感できた?

「夜中にまどかのお母さんがお酒を飲みながら彼女の話を聞いてくれるシーンがありますけれど、そういう家庭ってすごく恵まれているし、だからあれだけ優しい子が育ったんだなあって思います。あのお母さんとまどかの関係がうちと似ていて、わたしは小さいころから仕事をしていていろんなことがあったけど、母がよく話を聞いてくれていたので、お芝居をするうえであそこは共感できる部分が多かった気がします。誰かに毒をはき出せていたから、最後まで魔法少女にならないという決断ができたのかなって思います」

―一番印象的なシーンは?

「キュゥべえの『ボクと契約して魔法少女になってよ』のシーンですかね。まどか本人だと、『わたしの最高の友達』。全部がわかった上で言えた言葉だったりするのかなあ。『わたしだってもう絶望する必要はない』は、かっこよく言いたいセリフのひとつだと思いました。まどか自身もまわりの人たちから愛されていたし、わたしも現場の皆さんに大事にしてもらって演じられたので、一杯悩むこともあったけど、難しかったというよりはすごく熱中しました」

心の中から思想ごと変えてもらった

ありがとう。あなたはわたしの、最高の友達だったんだね

出演声優 鹿目まどか

難しい「普通」

―演じる上で難しかったことは?

「まどかは普通の子。普通というキャラクターが実はすごく難しくて…。ツンデレ、クール、ぶりっことか『型』みたいなものがあるとわかりやすいんですが。何が当たり前かを判断するのはすごく難しいけど、周りの人が支えてくれたので、すごくすんなりまどかになれたし、夢中になって演じられました」

―反響も大きかった。

「まさかこんなにも多くの方に見ていただけて受け入れていただけて、何かを考えるきっかけにしてもらえるとは思ってもいなくてビックリしました。こんなに多くの人に一瞬で力を与えることができるってすごいなあって思ったし、こわいなあとも思ったし、感動もしました。いろんな人に『見たよ』と言われたのは、月並みな言葉ですけどうれしいですね。頑張ったものを認めてもらえるのはうれしかったし、わたしを知らなかった人が『悠木さんをまどかで知りました』と言ってくださるとうれしいし、もっと頑張らなきゃ、精進しようと思いました。自分が幸せであることで幸せだと思ってくれる周りの人を大事にしようと思ったりとか、そういうことを今までもぼんやりとはわかっていたけど、ビジョンが明確に決まったというか、自分が幸せじゃないと誰も幸せにできないんだなあというのは、まどかを演じていて思いました。改めて大切な事を教えてもらった気がします。わたしが幸せに暮らす素敵なヒントになったと思っています」

―劇場版はどうなる?

「映画だと大画面になるし、音声を録り直したので芝居を強めに意識しました。絶望するときは思い切って絶望するし、泣いちゃうところは思い切って泣くし。劇場版は、テレビで1度見ていただいた方も、いっぱい見ていただいた方もさらに楽しんでいただけますし、まだ見たことがないという方にも、なるほどこういう作品なんだとわかっていただけるようなまとめ方になっています。多くの方に、もちろんまどかと同じ10代の方から年配の方まで見ていただけると思っていて、自分を見つめ直すきっかけになるというか、結構周りにも見ている人がいたりするかもしれないので、ふだん人と話さないようなことを話し合うきっかけになれるというか…。いろんな人たちに語ってほしい。見たら心にグサッとくるストーリーだと思うけど、『このシーンのここはこうだと思うんだよね』とか、話していただけると、『ここの人こんなこと考えたりするんだ』とか見つかったりするんじゃないかなあと。わたしももちろん、大画面で見たいと思います」

―夏休みは?
トマト片手にゲーム三昧

―ところで最近のマイブームはある?

「昔のゲームをしています。ゲームがすごく好きなんです。古いゲーム機を引っ張り出してプレーしています。夏休みはずっとやっていました。好きな食べ物は柑橘系。トマトも大好きで、おやつがミニトマト。普通のお菓子とかだと太ってしまうので…。ミニトマトをおやつにしています。夏休みになるとダンボールで送ってもらって、ざるで洗って、それを横に置いてゲームをやるんです」

―最後に特別版の読者にメッセージを。

「ここまで読んでいただいてありがとうございました。劇場版も、心を込めて何か伝わったらうれしいなあと思って頑張ったので、ぜひぜひまどかの最後とほむらちゃんの今後と、それぞれの魔法少女の雄姿を劇場版でも見届けていただけたら、それはとってもうれしいなあと、思ってしまうのでした」

©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Movie Project

◆悠木 碧(ゆうき・あおい)1992年3月27日、千葉県生まれ。20歳。4歳からテレビなどに出演し、2003年に声優デビュー。「魔法少女まどか☆マギカ」の主人公・鹿目まどかをはじめ、数々のアニメ、ラジオに出演。2012年第6回声優アワードで主演女優賞を受賞した。

大人の男性ならほむらを放っておけない

あなたを救う。それがわたしの最初の気持ち。今となっては……たった一つだけ最後に残った、道しるべ

暁美ほむら 出演声優 斎藤千和インタ♡

まずは3話まで

―『まどか☆マギカ』の魅力とは？

「ものすごくかわいい絵で、女の子がキャピキャピしていている作品だとなめてかかると、カウンターパンチを食らいます。まずは第3話まで見てもらえれば。それでもダメならダメだと思うけど、そこからはまったら最後まで抜け出せません」

―ほむらはどういう少女？

「転校生としてやって来て、無口で陰がありそうな女の子ですが、最初に見ただけでは彼女のことはわかりません。最後まで見て『ああそうだったのか』と思って、もう一度最初から見てもらえると、より好きになるキャラクター。『何でこんなことするのだろう、何でこんなことを言うのだろう』とまどかも思い続けるのですが、その意図がずっと謎で、最初見た時にはフラストレーションがたまる役かもしれませんね。でも、最後まで見ると、嫌いになることが難しいキャラクターかもしれないです。ただのかわいい子ではないし、実はすごい謎を抱えていて、それが重いというか。大人の男性であればあるほど、グッとくるキャラクターかもしれない。実は大和なでしこ的な感じがします。真意をわめいたりとか、わがままを言ったりせず、極限まで耐えて、あまり表に出さないというか」

―それぞれの魔法少女の性格とは？

「まどかは一見するとうじうじしていたり気が弱くて何事からも逃げているようにみえるかもしれませんが、わたしがこの物語に入れられても、まどかと同じことをすると思う。ほかのキャラクターみたいに強く戦って困難に立ち向かってみたいと思うけど、でも戦わない。実は一番意志が強くて、物事をきちっと分析できていないと魔法少女にならないという選択はできない。中学生の女の子だったら周りやその場の感情に流されて『わたしが世界を救う』『みんなを救う』となってしまうはず。そういう意味で、自分の弱さを知っている彼女は実は強い。だから、最後にある選択をするのですが」

―さやかは？

「一番、女子人気が高いキャラクターだと思います。女の子がすごく感情移入しやすくて、明るく友だちにしたいタイプ。まっすぐでズルをしなくて友だち思いだし。恋愛にはまって失敗もしてしまうけど、それが女の子っぽい感じ。見た目から受けた感じはさばさばしているけれど、一番女の子っぽい感じがしますね。マミさんはいい先輩で余裕があるように見えるけど、実はとても孤独で、とても寂しがりやで弱い人だったりという印象。パラレルな世界観がちょこちょこ出てきますが、一番最初に彼女が壊れる。そんなアンバランスさがとても魅力的だなあと。男の人からするとほおっておけないタイプだと思います。杏子は友だちというよりも家族とか身内にほしいタイプですね。一見、おおざっぱで男の子っぽいですけれど、すごく繊細に物事を見る目がある子なので、人の気持ちや揺れとかをいち早くとらえるし、何よりこの中のキャラクターで一番人のことを考えられますよね。人のために犠牲になれる。さやかもそんな感じで魔法少女にはなるんですけれど、実は半分自分のためでもあるから。だから、杏子が一番、人のために行動できていて、でも、それを表に出すのがあまり上手じゃなかった。最後まで見ていると、彼女がすごく優しいとわかります」

―キュゥべえは好き？

「好きですよ。すごく好きですね。なんかどうしても嫌いになれない、悔しいけれど。一番悪に見える立ち位置ではあるのですが、誰よりもぶれなくて、常に正しいことを言っているんですよね。でも、正論イコール正義じゃないんだとつきつけられるキャラクター。『一人が犠牲になっても多くを救えたほうがいいじゃないか』『宇宙を救うために犠牲になるのって何が悪い』って。それで物事を割り切れるのかって言われると、わたしもまどかみたいに迷うでしょうね。痛いところをついてくるキャラクター。現代社会でも正論を言われることが一番傷ついたりとか、分かっているよ、というときがあるじゃないですか。そういう存在です、キュゥべえって。すごく考えさせられる存在です。魔法少女の契約？ しないです。私、もう少女じゃないですし（笑い）」

―趣味は？ 映画。週に1回は見ます

一度見ると嫌いになるのが難しいキャラ

分からなくてもいい、何も伝わらなくてもいい。それでもどうか、お願いだからあなたをわたしに守らせて

答えは出さない

―反響は？

「反響はすごくありました。こんなに愛していただいてすごくありがたい。それだけ、魅力的な作品だと思います。それは自分が演じたからだけではなく、作品と関わった全員の力だと思います。誰も手を抜かなかったし、みんなが作品が好きで、全力を出し切って、それがお客さんに届いた結果だと思います。東日本大震災の日に、ほむらとしてのターニングポイントとなる第10話がオンエアできなくて、それがものすごく印象に残っています。そもそも考えさせられる作品だったけど、それがあってさらにいろんなコトを考えました。人の力ではどうしようもない流れに自分が巻き込まれたとき、自分には何ができるんだろうと全国の人が考えたと思うから、タイミング的にもすごく響いたと思っている。自分の役とか作品のことだけではなく、自分の仕事のこと、まわりの人との関わりとか、そういうことをより深く考えるきっかけになったのでは。それがきっと、この作品がムーブメントになったひとつの要因だと思います。この作品を見るたびに、ずっと忘れちゃいけないことを改めて考えさせられます。作品を見るとそのときの記憶って返ってくるじゃないですか。だから、作品を見て、当時のことをすごく考えます」

―印象に残ったシーンは？

「個人的には11話の独白のシーンかなあ。最初に台本を読んだときは重いことを言っているなあと感じるんですけれど、自分が当日アフレコでほむらのお芝居をしたときに、家で想像していたのと少し違う音が出たんですよね。明るめの音が。ぎゃあぎゃあ泣いちゃうと思ったんですけれど、けっこう我慢しながら、さらっと言葉が出てきた。ほむらは自分のことよりまどかのことを考えていた。自分の思いをただ一方的にぶつけているのではなくて、まどかの気持ちを考えてしゃべって説明をしていて、そこは自分が（台本を）読んだときと実際にほむらを演じたときとギャップがあったシーンで、個人的に印象に残っています」

―作品への思いは？

「分析しながら見るより、心に響くものを素直に感じてもらったほうがこの作品に関してはいいと思います。ここはこうでこういう意図だったのだろうかとか、ここがあったからこういうセリフがあったとか考えても答えが出る作品ではないから。5年くらいたって見返したら、全然違う印象になるかもしれないし、その意味で自分の内面を見つめる機会をくれる作品だと思うので。なので演じる上でも答えを明示することはしていません。明確に答えを出したくなる作品ではあるけれど、だからこそ出してはいけないだと思っています。受け手の方にゆだねたいので、作り手はあまり答えを出しちゃいけない」

―ところで趣味は？

「旅行が好きなので、すぐどこか行っちゃいます。映画も大好きです。仕事のスケジュールが詰まってしまうとダメなんですけれど、それでも月2、3本は必ず見ます。前評判は聞かず、劇場の予告とかで見たいなあと思ったのを見るんですけれど、ハリウッド大作といわれるものも一通り見ますし、単館のやつとかも好きで見に行きます。最近良かったのは『WIN WIN』。韓国映画の『サニー 永遠の仲間たち』もすごくよかったですよ。大人になった女性が仲がよかった女の子たちとの少女時代を思い出すという話なんですけれど、女子にすごく響く映画でした」

―見たことのない人へ 見て損をさせない作品です

―読者にメッセージを。

「『まどか☆マギカ』をご存じなければ、本当に一度見ていただきたいと思います。手前みそではありますが、これだけ見て損をさせない作品も珍しいです。お年の方からすると最初はとっつきにくい絵かもしれませんが、それだけを理由に見ないのはもったいない！ 絶対に損はさせません、と心から言える作品です。ぜひ劇場でご覧になっていただけたらと思います」

◆斎藤 千和（さいとう・ちわ）3月12日、埼玉県生まれ。「魔法少女まどか☆マギカ」の暁美ほむら役以外にも「化物語」、「黒子のバスケ」などのアニメ、ラジオなどに多数出演している。

©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Movie Project

水橋かおり インタ♡

闘っている時のマミが一番好き

今の生き方も、あそこで死んじゃうよりは余程良かったと思ってる

魅力がいっぱい

―作品の一番の魅力は？

「全体的にバランスがいいなあって思いました。蒼樹先生の絵がかわいらしくて、虚淵先生のストーリーが骨太じゃないですか。魅力がいっぱいあって、どういう作品か想像できそうでできないところが一番です」

―この作品の魔法少女とは？

「闘っていたらケガもするし、ヘタをしたら死ぬ。魔法少女の活動を本当にリアルに書くと避けて通れない部分ですよね。オーディションのときからマミの最期を知っていましたが、（脚本に）どういうふうに死ぬとは書かれていなかったので、まさかああなるなんて…。けど、やはりそれがリアル。まどかは一番弱そうだけど、一番強い子。最後まで変身しなかったけど、みんなを救うためのお願いをしたのもすごくよく分かる。そしてその後押しを心ならずもしてしまう結果になったほむら。ずっと、まどかのことを助けようとして頑張っていたわけじゃないですか。まどかも『ほむらちゃんがこんなに頑張ったのだから、わたしも頑張らないと』と思ったのでは。そういうのってあるじゃないですか。頑張っている人を見て大きな勇気をもらうって。自分には何もできないと思っていたまどかが、何でもひとつ願い事をかなえる力をもらった時、何を願うかものすごく迷って、みんなを根本的に救うという発想に至るまでの流れが、わたしは分かる気がします。システムごと変えないと救えないものってリアルにもたくさんありますからね。自分を犠牲にしても、そのシステムと向き合ったまどかとほむらはすごいなと思いました」

―マミという役をどのように演じた？

「小さい元気な感じの役が多かったので、ちゃんとお姉さんに聞こえるようまず技術的な面で気をつけました。あと、『まどか☆マギカ』のなかで、マミは物語の中で死ぬことが決まっていましたが、それは絶対に必要な役割なんだと思って演じました。キャラクターにとって悲しいことは、いつの間にかいなくなること。『ずっと生き残っているのに、存在感が全然なくて注目されない』、『5人いるのに4人でしょ』とか。それに比べたらマミは見せ場を与えられて幸せ。かわいそうだからと無理に生かされても、役割がなくなっていくこともあります。そういうのは逆に悲しいですね。ちゃんと役割があって、そのために死ぬのはむしろ喜ばしいことかなって。マミがずっと生きていたらどうだっただろうと考えることもありますが、彼女は年長者かつ魔法少女の先輩なので、説明係になってしまっていた可能性も。それもひとつの役割ですが、今のマミさんの方が好みですね」

―趣味は？
フィギュアは女の子ばかり100以上

―印象的なシーンは？

「マミは闘っているときが一番好き。第2話でエンディングの曲を流して闘っているところがあって、それがすごい好きですね。リハーサルビデオを見ていた時、色がついているのを早く見たかったんです。淡々とスタイリッシュに闘っていて、そこが一番好き。あとさやかと杏子が2人で教会で話すシーンも好きですね。あの2人はすごく似ているけど、結局分かりあえなくて…。杏子はさやかを説得しようとして彼女なりに本気で全力で言ってみたのに、やっぱりダメだったという時の悔しさ歯がゆさ、伝わらないつらさが、ああ分かるな、こういうことあるなって。それからマミさんが、『他人の願いをかなえるのなら、なおのこと自分の望みをはっきりさせておかないと』と言うセリフがありました。これはさやかにだけでなく自分自身へも刺さったセリフでしたね。自分が本当はどう考えているか知らないと『後悔するのは自分だぞ』、って」

―ファンの反響は？

「今までとは違う傾向の役だったので、声が今までの役と全然違う』と随分驚かれました。電車の中でも『まどか☆マギカ』の話をものすごく真剣にしている子がいて、それを聞いたときに結構見てもらっているんだと。その話を現場でしたら、『実はわたしも見かけたよ』という声がいくつかありましたね。それで見てもらっていると実感しました」

出演声優 巴マミ

自分を映す鏡のようなところのある作品

無理してカッコつけてるだけで、恐くても、辛くても、誰にも相談できないし、独りぼっちで泣いてばっかり

感覚でとらえて

―ところで話は変わって、趣味は？

「リカちゃん、ジェニーとか、お人形を集めることです。『まどか☆マギカ』のグッズも集めています。フィギュアとかアニメのグッズは好きですね。『まどか☆マギカ』のフィギュアもいっぱい出ているのでうれしいです。フィギュアは100以上ありますが、きりがないのでそれ以上は数えたことがありません。不思議なことに女の子だけなんですが、ほとんどは飾って置いてあります。凝り性なので収納にもこだわってみたり。オタクライフを満喫しています」

―映画でどういうところを見てほしい？

「この作品はお願い事を自分の命と引き換えにかなえるという話。一度、自分の願いについて真剣に考えてみるきっかけになったらいいのかなって。自分が魔法少女になるとしたらどうしよう、もしかしたら死んじゃうかもしれないっていうことと引き換えに、かなえる願い事ってなんなんだろうって。わたしもこの作品に関わって、そこまでするお願いってなんだろうって考えました。人の生き死にとか人生の大きな問題とかいろいろありますよね。自分がこの立場だったら命を懸けて何をお願いするか、作中の誰に考え方が近いかを考えてみると、自分のことがよく分かって面白い。そういう意味では自分を映す鏡みたいなところのある作品だと思います。あなたの命と引き換えにお願いをかなえますよって言われたらどうするか。それがはっきりしてくると共感できるキャラクターが意外と変わってくるかもしれないですね」

―キュゥべえに会ったら、どんなお願いを？

「仕事のことになりますが…。演じていて、自分の気持ちを本当にそのまま言っているなあって役をやったことがないので、これはわたしだと思える役に会ってみたいです。今のテンションだったら願ってしまうかも。キュゥべえさん、よろしくお願いします」

©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Movie Project

―キュゥべえにお願いするなら？
これは私だと思える役に会ってみたい

―テレビ版と比べて変わるところは？

「テレビシリーズは全部見るのに時間がかかりますけど、映画は集中して短い時間で見られますからね。劇場版から入って、テレビ版を見るのもいいかもしれないですね。一度見た人も見てない人も、絵が変わっているとかセリフが変わっているとかの部分だけではなく、全体を感覚でとらえると楽しいのではないかと。そのためにも、ぜひ一度大きいスクリーンで見てほしいです。あとマミさんの最期のシーンがカットされていなければ、若干アドリブが加わっているので聞いてみてください」

―特別版の読者にもメッセージを。

「偶然手に取った方は、これをきっかけに見ていただけるとうれしいです。すごく面白いですよ。これも何かのご縁ですし、よければテレビシリーズから見てもらって、はまっていただければ。こういう新聞はなかなか出ないので、複数部数買うのもいいかもしれません。ボロボロになってからもう一部、と思っても、もう売っていないということもあるので、後悔しないようにまとめ買いしてくださいね。わたしもいちまどかファンとして買いますよ」

◆水橋 かおり（みずはし・かおり） 8月28日、北海道・札幌市生まれ。主な出演作に「魔法少女まどか☆マギカ」、「ひだまりスケッチ」、「カスミン」など多数。

さやかが居てこそ作品の意図が見えてくる

あるよ。奇跡も、魔法も、あるんだよ

喜多村英梨 インタ♡

いい意味の裏切り

―作品の一番の魅力は？

「いい意味で、裏切りの多い作品ですね。ウソだと思ったことが本当で、本当だと思っていたことがウソで、というようなことが、回が進むごとに、衝撃を与えるからくりが多いと思います。ひとつひとつのセリフの重み、世界観の背景や仕掛けというところが見えてきた瞬間、みなさんの心を動かしたんだな、と思ったりします」

―演じたキャラクターがどんどん好きになった？

「『魔法少女』というタイトルで、ファンタジー、アニメということで完ぺきなキャラクターを、想像されると思います。でも、私が演じているさやかは特に、人間らしい、というか、ドラマになっても、一番ドラマのキャラクターらしいですね。セリフや、心情を見せるところだったり」

―その理由は？

「魔法少女という非現実的な状況になった時の反応だと『よっしゃ頑張ろう』とか、想像できると思うんです。でも、さやかの場合、魔法少女としての適応能力が登場人物の中で一番なくて。魔法少女というものにあこがれる、ある意味の"ダサさ"や年相応の女の子が受ける衝撃を体現するようなカジュアルなキャラクターだな、と感じています。彼女がだめだからこそ、作品の意図とか仕掛けみたいな物が見えてくる、という意味ではとってもおいしい役をやらせていただいているなぁ、という、感謝の気持ちでやっていました」

―さやかは「恭介のために」魔法少女になるが？

「同じ女子として、『自分の先輩の魔法少女のマミさんが、すごく大きな存在だった』と理由づけようと、魔法少女やまどかと接していたな、という部分が結構あると思っていて。（魔法少女になったのは）その延長線上だったかな、って思いました。もちろん恭介のためのような気もします。『大好きな人を思うから』こその正義感、道徳観。でもその背景で自分のエゴなのか。そういうところが見えました」

―エゴとは予想外。

「この作品って、倫理の授業でも使える、って思うくらい、人間心理もしっかり描かれています。役の一人としても、視聴者の一人としても、仁美っていう親友の中から恋のライバルが来たときの心情の乱れなんか、一番乙女らしくてとても人間味があってすごく感情移入しやすかったですね。女性役者陣の中では『さやかが一番同情引くよ』って言ってくれる方が多い一方で、男子からは『ドロドロしてる』『さやかこえーなぁ』って。そう言ってくれているのも、役者冥利（みょうり）に尽きるなぁ、って思います。そういう風に見えてた方がおもしろいし、それを意図して虚淵先生がシナリオ書かれてますし。そこがあったから、周りのキャラクターの強さだったり、逆にもっと違う次元での弱さも描かれていたかと思いました。仁美のよさとかも、逆に描かれていたかな」

―運動は？

スポーツのスの字もない

―ファンタジーの世界の中で演じるのはむずかしかった？

「異性の方に『さやかヤなヤツだな』と思われたとしても、それはそれで（キャラクターを）気に入ってもらえない裏背景、仕掛けみたいなところは『しっかり、お客様だませてる』って感じてます。キャラクターに対しても感謝だし、山をクリアできたのかな、って。変にポジティブですけど、思えて。もっと嫌ってください（笑い）って感じてます。本当は愛して欲しいですけど」

―キャリアの中で難しかった？

「そうですねぇ。自分の実年齢と違う、自分の通ってきてない、非現実的な能力、舞台背景の中で、現実的な中学生女子の心情を演じるというのは、難しくも、やりがいのあるものでした。一方で、一番ありえそうな人間らしいキャラ。そういうところではリアルを追求できたかな。非常に透過しやすかったですね」

―他のキャラクターを分析してみると？

「まどかはホントに『優しい』に尽きるんじゃないですかね。さやかとは違う方法で他人のために自分を犠牲にして。ほむらは全然からくり知らないと、ホントにいけ好かないヤツなんですけど、種明かししてみると、すごいキャラ、心奪われるような、いますよね。杏子はとってもアクティブ。『どうにかしてやりたい』って言うのがちゃんとあるけど、ぶっきらぼうゆえに、すごく伝わりづらいですね。特にベクトルが近いようなさやかには。マミさん？　マミさんはマミさんですよ。ある意味、『魔法少女のアイコン』。鏡みたいなもんですよ。だけど、さやかもたぶん、華麗で完ぺきに見えたマミさんがかいま見せた『一緒に仲間になってくれるの？』っていう言葉にちゃんとした女性らしさ、弱さがあって『こんなに頑張ってたんだ』っていうのが、あったと思うんです」

一番乙女らしくて感情移入しやすかった

あたしって、ほんとバカ

出演声優 美樹さやか

キュゥべえ好き

―キュゥべえは？

「私個人としては大好きなキャラクター。だけど、さやかにとっては悪魔みたいな、にくいヤツだったでしょうね。ただ、言ってることが説得力があってもある。そこがやっぱり、憎みたいけど、惹かれちゃう、怪しい魔力をもっているような。何か営業マンタイプですよね（笑い）。勧誘のプロですね。ホントにヤツの本質を知らないで出会ったら、言いくるめられた感もなく、無理矢理勧誘された感もなく、敷かれたレールに乗っちゃってるんじゃないですかね。はい」

―今、キュゥべえに会ったら、契約する？

「からくりを知っていたら、重たすぎて断っちゃいますよね。でも、言葉じゃないんですよね。ヤツの勧誘の仕方。結局、見越して、すべて点と点がつながるようなフラグを上手に立てるタイプですよね。さやかが自分で進んで魔法少女になったような気もしなくもないけど、どっちなんだろう、っていうのもあるじゃないですか。そういう状況へ実はキュゥべえに導かれていて、魔法少女になってた、みたいなことはあるかもしれませんね。くわばらくわばら（笑い）」

―一番印象に残った場面は？

「ん〜、いっぱいありますけど…。やっぱり、キュゥべえのセリフですかね。自分がさやかになりきっている分、必死でやってきたものを、『大変だったよ。こういう感じでここまで導くのは』くらいの感じで、しれぇ〜と説明した後にエンディング、っていう演出含め、印象的でしたよね。キャラクターの過ち、悲劇を通して、作品のからくりをスルッと見せちゃうところが、『なるほど、うまいこといったね、虚淵さん』みたいな衝撃を受けましたね」

―劇場版での変化は？

「再収録をするということの意味をしっかり意識してやらないと、意味がないと思ってました。もちろん核の部分は、変わってないですけど。私たちにとっての"2巡目の世界"。でも、彼女（さやか）にとっては"1巡目"。だからこそ、この何気ないシーンをもっと何気なく見せようとか、考えました」

―ところで、スポーツに興味は？

「ホントに申し訳ないくらい、スポーツのスの字もないんです。泳げない、走るの遅い、みたいな。『ほむらかっ』という感じですね。唯一、観戦して楽しくてハマったのは、深夜にやっていた海外のビリヤードの試合の中継。テレビだと球の方向が説明みたいなのがあって、リプレイ画像で、球筋画像を映像処理したりするじゃないですか。最初の説明通りに球が通っていて、それはホントに魔法使いみたいだなぁと思いましたね。あと、1回おいしい、と好きになっちゃうと、ずーっと通っちゃう、そういうアクティブ、はありますね（笑い）。初めて一人暮らしした時、カルボナーラに挑戦したんですよ。これが、自分の中で一番大ヒット。『これうまくできたわぁ』ってなって、1週間連続で3食カルボナーラ。結局、病院行きましたけど（笑い）」

―最後にメッセージを。

「自分のフィールド上だと、スポーツ新聞さんと深く関わらせていただく機会ってそうそうないと思います。これって『まどか☆マギカ』が持っている力かな、と感じてます。それだけ多くの層の方の琴線に触れる設定やセリフが本当にふんだんに詰まった作品です。さやか、っていうムードメーカー的な、作品を動かしていけるような、キャラクターをやれたことに誇りを持っています。新章ストーリーだと推していける作品になりました。アニメにこれまで縁のなかった方も心動かせる内容になっていますので、楽しんで、見に来ていただければ、と思ってます」

―おいしいと思うと

1週間1日3食カルボナーラ

◆喜多村英梨（きたむら・えり）1987年8月16日、東京都出身。2003年「LAST EXILE」で声優デビュー。翌年、歌手としても活動開始。05年「BLOOD+」で主人公役に抜擢される。

©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Movie Project

野中藍 インタ♡

杏子は優しさが不幸につながった悲しい子

頼むよ神様、こんな人生だったんだ。せめて一度ぐらい、幸せな夢を見させてよ

初めての役どころ

―まずは『まどか☆マギカ』の魅力を。

「絵柄からは想像できないストーリー、ですかね。はい。絵は、ちっちゃなお子様が日曜日の朝に見ていそうな感じですよね。もしくは、秋葉原とかで人気になりそうな、かわいらしい絵柄をしているのですが、とにかく、かわいい絵柄とストーリーのギャップに、私は一番驚きました」

―ギャップは大きかった?

「オーディションを受ける時に、いわゆる『魔法少女もの』っていうストーリーかな、と思っていました。白いキュゥべえというキャラクターに、『魔法少女になって』って言われて、一緒に地球を救う、みたいなお話しだと想像していたんです。だから、まさかああいう展開になるとは、っていう感じです」

―杏子ってどんなキャラクター?

「初めはどちらかと言えばヒール役。ちょっぴり不良っぽい雰囲気を持った、女の子として登場しましたよね。『魔法少女まどか☆マギカ』の世界の中で、ちょっとしたスパイスになれれば、と思って役作りをしました。言葉遣いも、少し昭和の不良をにおわせる感じですよね。『ちょろちょろするんじゃねえ!!』、『このウスノロ』とか、『食いもんを粗末にするんじゃねえ!!』、殺すぞ!!』とか、という言葉遣い。そういう雰囲気、好きでした。人のために(魔法少女になるためのお願いを)使いたい、っていうさやかに対して、『自分のために使うものだ』っていう相反する考えを持っているじゃないですか。でも、ストーリーには杏子の過去についてのお話もあって、それを知って杏子を見ると、また見方も変わりますよね。本当は、家族思いの優しい子なんです(笑い)。けどその優しさが、不幸につながってしまったっていう、悲しい女の子です」

―演じるのは難しかった?

「こういう役どころは初めてだったので、悩みました。初めはマミさんの縄張りを奪いに(物語に)入って、さやかと出会って、ちょっとずつ、変わっていく。最後、杏子にも思うところがあって、ああいう形で杏子の結末を迎えた、っていう流れが私にとっては難しかったです。ざっくりしたストーリーは知らされていたのですが、オリジナル作品なので、細かいところまでは何も知らなかったんです。私たちも次の台本をいただいて、『あっ、こういう感じなんだ』っていうのを知りました。最近は原作のあるものに出演させていただくことが多かったので、台本をもらって初めて次を知るのはすごく楽しかったですけど、プレッシャーでもありました」

―杏子はさやかとは出会ってすぐに衝突した。

「やっぱり、少しイライラしたんじゃないでしょうかね。かつての自分を見ているようで、いらついて攻撃をしたのかな、って思って演じてました」

―福岡出身 家族みんなホークスファン

―それが最後は「さやかのために」となった?

「どうでしょうね…。『さやかを助けたのではなくて、自分の心を助けた』って考えた方もいらっしゃるし、『さやかを助けるために一緒に』って思われる方もいらっしゃると思います。見た方によって、いろんなとらえ方があると思うんです。それを楽しむのも、『まどか☆マギカ』の楽しみ方じゃないでしょうか。『あれは、どういうことだったんだろう?』とか、『私だったら、こうだったのかな?』とかっていうことを推測しながら見ていただきたいですね」

―しかし、杏子はいつも何か食べている。

「最初がクレープで、たい焼きにポッキー。教会ではりんごで、あとは団子とかローストチキンとかでしたかね。どこかで調達してきた食料をいつもがっついて食べてみたりしてましたよね。アニメの時は絵が100%出来上がっている状態で、声を収録しているわけじゃないんですよ。細かいところが…。『あれっ!? このセリフでは食べてますけど、こっちは食べてませんか?』とか、大変でした。食べても太らない体は、『うらやましいなぁ』って思いますけど(笑い)。でも、さやかに対するいらつきなのか、自分に対するいらつきなのか、そういうストレスで食べてたのかなぁ、って思ったりもしました」

―今、キュゥべえと出会ったら?

「契約する、かもしれません。キュゥべえって、汚いなぁ、って思うんです。いつも、すっごい大ピンチの時に声をかけに来るんですよ。窮地を狙って『僕と契約したら、何とかなるよ』って声を掛けてくるんですよね。弱っているところにつけ込んでくるので、私もそれくらい弱っていたら、つけ込まれてしまうかな、って思うことはあります」

出演声優 佐倉杏子

昭和の不良を感じさせる言葉遣いが好き

食うかい?

言えないのが……

―何をお願いする?

「杏子には怒られるかもしれないですけど、私も人のために使いたい、って思います。家族のためとか。お父さんのためには…。どうかな(笑い)」

―杏子から見た他のキャラクターは?

「まどかのことをきっと『面白い子だな』と思っていると思うんです。いつも、質問をまどかに投げかけると、予想した答えじゃないものが戻ってきて、『面白いヤツだな、アンタ』とか、笑って返すことが多いです。ほむらは、最初正体が分からないこともあって、『こいつ、何なんだ』っていう感じですよね。マミさんとは『昔仲間だった』という過去があって、一番、関係が深い仲なのでは、と思います」

―さやかは?

「一番気になる相手で、自分とは立ち位置が真逆の相手なので、いらだっていたとは思うんですけど、『友達になりたかったのに』というセリフがあったように、大好きだったんじゃないかな、と。最後は、ダメとわかっていても何とかしたい、という思いだけで戦っていたんじゃないですか」

―他に演じてみたい役は?

「それぞれのキャストの方がぴったりなので…。私なんかが、って思うのですが。しいていうならば、マミさんですかね。作品中に、技名を叫ぶんですよ。『ティロ・フィナーレ!!』って。魔法少女っぽい感じですよね」

―一番印象に残っているセリフは?

「『食うかい?(笑い)』」

―なぜ?

「この人ちょっと、仲間になりたいな、って心を許すと、食べ物をあげるんだ、っていうのが一番印象的です。一番かわいいな、とも思います」

―作品を通じて感じたことがあれば。

「反響の大きさはすごく感じました。最終話の時は、他の作品の声優さんから、『今夜なんでしょ、ついに』って声を掛けていただきました。『続きどうなるの』ともよく聴かれました。オリジナルだから、本当に気になっていたんでしょうね。『私もうすぐ死んじゃう』っていうことが、言えないのが…。ファンの方から『死んでしまわないか、ドキドキして見てます』って、ツイッターとかメールでいただくと辛かったです」

―ところで、福岡県出身で、プロ野球はソフトバンクファン?

「はい。家族みんなソフトバンクファンです。『いざゆけ若鷹軍団』(ソフトバンクの球団歌)歌えます。ずっと秋山(幸二)選手が好きでした。監督になられましたけど。福岡ヤフードームでの観戦経験? もちろん!! 家族みんなで観戦して、7回にはちゃんと風船も飛ばしましたよ」

―自身でスポーツは?

「今はマラソンですね。11月に神戸マラソンに出るんです。初めてのフルマラソン。アーティスト活動もやらせていただいてて、ライブ前に体力作りで走ってたんです。でも、ライブを最近やっていなくて、期間が空いてしまったので、最近ちょっとずつ走り始めました。フルマラソンには以前から興味があって、『いつかは』と思っていたんです。少し前に8キロのレースに出た時、走った後にみんなで、ワイワイお酒を飲んだりするのが楽しくて。目標? 完走です。うれしくて、いろんなところでお話ししているので、途中でリタイアできませんね(笑い)」

―スポーツは 神戸マラソンに出るんです

―劇場版公開についてメッセージを。

「アニメ放送中からのファンの方にも見ていただきたいですし、劇場版だとストーリーがギュッっと、見やすくなっている と言うか、全く初めましての方でも、楽しんでいただけると思います。劇場版で杏子が変わったところ? ありました。それはぜひ劇場版で、確認していただけたらな、と思います。変化の大きさ? ぜひ、劇場に足を運んでいただけたら(笑い)。大きな画面で見ていただけたら、うれしいです」

「魔法少女まどか☆マギカ」
劇場でぜひみて下さいね!!
杏子

◆野中　藍(のなか・あい) 6月8日、福岡県出身。ラジオドラマでデビューし、「ONE PIECE」でアニメ初出演。主な出演作に「さよなら絶望先生」、「CLANNAD」など。

©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Movie Project

わたしがキュゥべえに歩み寄っていった

僕と契約して、魔法少女になってよ―

加藤英美里 インタ♡

淡々と演じた

―作品の見どころを

「魔法少女というと小さい子が見るアニメというイメージがあって、わたしの世代だとサリーちゃん、クリーミーマミ、今ではプリキュアをイメージすると思いますが、この魔法少女は、これまでの魔法少女とは違う運命をたどります。皆さんが持っているイメージがガラッと変わるのでは」

―キュゥべえはどういうキャラクター？

「ものすごくかわいいマスコットキャラクターだなって思って、どんなキャラクターにしようかなと考えていましたけれど、キャラクターを詳しく知らされないままストーリーとともにキュゥべえの本質を知っていったので、話を重ねることにどういうふうに演じるか考えることが多くなって、常に難しいなあと感じていました。でも、その分やりがいがあるというか楽しみになってきて、わたしがキュゥべえに歩み寄っていかなければいけないと感じ、それがすごく難しく感じました。初めに演じたときの方が、なりきれていたなあって思います。」

―キュゥべえの印象は見る人によって分かれるのではないでしょうか。憎らしいか、かわいいのか。

「わたしは、ずっとかわいいと思っていました。ファンの方からはいろいろな反応がありました。かわいいというだけではなく、ショック、むかつく、ひどい、という方もいましたけれど、そう思っていただけたというのは、逆にいうと、ちゃんとキュゥべえになれていたんだというほめ言葉ととらえていました。ひどいと感じてくれているのは、それだけ作品に入っていたということ。成功だなって思いました。今回は新境地というか、ずっとこういうマスコットキャラもやりたかったし、裏のあるような役をすごく演じてみたいと思っていました。あの小さいキャラクターにいろんなものがぎゅっと詰め込まれているので、すごくやりがいを感じ、自分の中でもかなり大きな役だったなあと思いますね。何一歩成長したというか、何かを得たような気がします。ほかにも素敵な作品をやってきましたけれど、ずっとより濃く生き続けているキャラクターだなあって思います。あの見た目なので、かわいいっていうようなポジションとか、ちょっとおちゃめなところがあるし。すごく見た目がかわいいし、行動も動物的で寝っ転がって背中かいてみたり、猫ちゃんがするような動作をしてすごく愛らしいのに、憎たらしいところもある。その両面を持つキャラクターってあんまりいないんじゃないかって思いました。本能のままに生きているみたいな感じがして」

一何も知らず契約するなら 今の幸せが続く保証が欲しい（笑い）

―役は難しかった？

「演じるときは、淡々と何も感じず告げるようにしました。一番よくしゃべっているのがまどかなんですけれど、彼女があれだけ悲観的になっていたりするのを見ていると、逆にもっと苦しめてやろうという気持ちになっちゃう。もっと苦しめるには、より淡々と当たり前のように告げたほうがひどいと思ったんです。人間、無関心というのが一番つらい。気にもされることが一番ショックで、無視さわってもらえないというのが、自分の中でも一番ショックだと思います。ひどいこと言うときも淡々と。ひどいことを優しく伝えるほうが、ときにはよりひどく感じるときがある。『死んでくれる気になったらいつでも言ってね』というセリフがあるんですけれど、話が進むにつれて、無機質になっていたと感じはありますね。初めの1、2話はそういう本質があると知らないでやっていたので、今となってはキュゥべえらしさというかひどさというか、腹黒さというか、逆に伝わる感じになってよかったなあって思います。知らされないままでよかったなあって思いました。ストーリーを知らされていない分、いい意味でエーッという、いい裏切り方をされたので、アフレコは毎回楽しかったですね。こんなはずじゃなかったのにというわけじゃなく、えっ！ こうなっていくんだ、この先どうなるの、とこの先を知りたくなるようなお話の展開だったので、いい意味で裏切られて、余計楽しみになった感じです」

あの小さな体に色んなものが詰め込まれてる

戦いの運命を受け入れてまで、君にはかなえたい望みがあったんだろう？

出演声優 キュゥべえ

あの絶望感が……

―印象的なシーンは？

「魔法少女がどういう存在なのかを打ち明けたときが一番衝撃的なシーンでした。今までの魔法少女って人を助けることをメーンとして一生懸命やってきたのに、わたしたちが今までやってきたことはどうなんだろうというか、自分の背負った本当の運命を知ってしまった瞬間の、あの絶望感がやっぱり忘れられないというか…。見ている側としてはすごくショックだったなあ、というのはあります。この作品を通して、自分のかなえたい奇跡があったとしても、それがかなうときはそれなりの対価があるんだなあ、と思いました。イヤなことがあった分、それだけのいいこともあるんだろうなあ、っていうふうに。奇跡とは言わなくても、イヤなことがあったぶんの幸せが返ってくるのかなあって。キュゥべえはかなえられたと思いますけど、うーん、微妙ですよね。エンディングのほうまでいくと、怪しいところではありますね。キュゥべえの願いのほうが、魔法少女の願いよりも大変な願いなんじゃないかなあと思いました。」

―キュゥべえと出会ったら、魔法少女の契約をする？

「うーん。もし、まどかみたいな運命というか、ストーリーのような魔法少女ということがあらかじめ分かっていたら契約はしません。ただ、本当に分からずに、何でもかなえてあげると言われたら、何かお願いしちゃうんだろうなあと思います。大きな対価があると知らなかったら。とりあえず、一生幸せになれる保証がほしいです（笑い）。今が幸せな分、何か不幸なことがあるのが怖いと思っちゃうので、いまの幸せな状態が続く保証がほしいです」

―話を変えて、最近のマイブームは。

「スマホの待ち受け画面で海水魚を飼っているアプリを入れています。おうちで魚を飼育するのは難しいじゃないですか。見ていていやされるし好きだし、飼いたいとは思うんですけれど、できないなあと思ったときにそんなアプリを見つけたのです。何もないときはじっと画面を見てお魚が泳いでいるのを見ます。あの人、何見ているんだろうと思われるかもしれないけれど。お魚がえさをぱくっとしたらニヤニヤしたりして」

―劇場版の見どころを。

「どうなるんでしょうね。わたし自身もすごく楽しみで、いろんな方がこの作品はお話が無限に作れると思っているので、いろんな想像をしていると思う。新作もきっと、皆さんの想像をいい意味で裏切ってくれるんじゃないか、こうくるかって裏切ってくれるんじゃないかとすごい期待しています。メーンの魔法少女とキュゥべえに関しては、セリフの8、9割を取り直しているんですよ。同じように演じてはいるんですけれど、キュゥべえにとっては一番、感覚が違うというか、1、2話が大変でストーリーを知ってから新たに取り直しをしたので、ここはもっとこうしたい、ああしたいとか、追加でアドリブが入っていたりとか。大きくセリフが変わっていたりするのではないですが、追加されている部分があるので、そこは声を入れ直しているんだと意識して見てもらえると、テレビシリーズとは違った見方ができます。テレビになかった変身シーンが入っているので、ぜひ見ていただけたら。変身シーンはよかったです。かっこいいですよ。キュゥべえはそんなに変わりません。全部取り直しているので、何か今までとちょっと言い回しが変わっていたりするところもあるかもしれませんね。淡々というのは変わりませんけれど」

一マイブームは？ 海水魚を飼育するアプリ

◆加藤 英美里（かとう・えみり） 11月26日、東京都生まれ。主な出演作に「魔法少女まどか☆マギカ」、「らき☆すた」、「出ましたっ！パワパフガールズZ」など多数。2008年の第2回声優アワードで新人女優賞、歌唱賞を受賞した。

©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Movie Project

アスリートが語る 1 まどか☆マギカ

大江香織さん（プロゴルファー）

一番の魅力は「ダークな魔法少女」というところ。この絵から内容が想像できないですよね。毎週録画していて、試合から帰ってきたら「真っ先に見る」みたいな感じでした。

放送が始まったときから「すごい面白い!!」って聞いていたんですが、私は基本的に女の子がいっぱい出てくるアニメは見ないので、ずっと見てなかったんです。今年の4月くらいにまた、別の友達から「本当に面白いから、絶対見た方がいいよ!!」って言われて。ちょうどテレビの再放送もあった時期なので、見始めました。女子プロだと川満（陽香理）さんも見てたかな…。ハマりました。

理由ですか？ やっぱり、これまでの「魔法少女もの」と、全く違う部分ですね。「ダークな魔法少女」というところが一番の魅力ですよね。タイトルと絵柄、内容のギャップが大きい。この絵から、内容が想像できないですよね。それに、虚淵（玄）さんが脚本だと知ったことが大きかったですね。虚淵さんの「Fate/Zero」（2006年に発表された伝奇小説）が大好きだったんです。毎週、録画していて、試合から帰ってきたら、「まず真っ先に見る」みたいな感じでした。

一番気になったキャラクター？ さやかちゃんです。大好きなキタエリ（喜多村英梨）さんが声優さんでしたし。本当にかわいそうで、思わず見入っちゃいました。「明るくて、元気なんだけど、だんだん影を抱えていく」というところ。恭介くんのことをきっかけに、"崩れて"いくじゃないですか。「どうあがいても、抜け出せない」みたいな、負のスパイラルに入り込んでしまって。「人の幸せを願えば願うほど、人を憎まずにはいられない」というさやかちゃんのセリフは、一番考えさせられたところですね。「深いなぁ～」って。「奇跡も魔法もあるんだよ」っていう、キュゥべえと契約する直前、病院の恭介くんの前で言った言葉も印象に残っています。

途中から「絶望しないで」という感じでしたよね。さやかちゃんのように、「あの子が彼のことが好きだから、私は…」というのは、私の性格の中にはないですけどね。いい子過ぎて、逆に周りに気を使いすぎて、結果的にソウルジェムが濁ってしまう、というのが切なかった。杏子ちゃんとも、魔法少女ではなく出会えていたら、「本当に仲良くなれたのに…」と考えてしまいました。

さやかちゃん以外だと、のほほん、としたキャラが好きなので、まどかちゃんですね。女子プロゴルファーの世界にはいないタイプですよね（笑い）。涙したのは、最終回のほむらちゃんの"何回もやり直す"ところ。やっぱり、ふつうの、"気軽な気持ちで見るアニメ"というものとは少し違いますよね。いろいろ考えさせられました。

そういえば、キュゥべぇのゴルフのクラブカバーがあれば、欲しいんですよね。一番インパクトがありそうじゃないですか。

考えさせられたといえば、キュゥべえは"名セリフ"が多いですよね。「その発想はない」みたいなことを言うから、「確かに」とうなずいてました。

もし、私の前に出てきたら？ 魔法少女にはならないと思います。怪しすぎます、キュゥべえ（笑い）。今のところ、お願い、もないですし。でも、どの子も契約する時は、「願いをかなえてもらわないといけない状況」でしたよね。そんな状況の時に現れたら？ ヤバいですよね。そういうの、突いてきますよね、キュゥべえって（笑い）。でも、契約するとしても、ゴルフのことをお願いすることはないと思います。やっぱり、「だれかのために願いをかなえてもらう」と思うんですけど…。

劇場版で一気に見られる、というのは、テレビの時よりももっと入り込んで見られる気がします。ほむらちゃんが戦う「ワルプルギスの夜」なんて、テレビで見ていてもかなりの迫力だったし、いろいろ飛んできて。大きい画面だと、もっとすごいと思います。（劇場版は）もちろん見たいです。ストーリーが分かっていても、何回見ても、その都度、おもしろく感じるお話ですし。

そういえば…。キュゥべえのゴルフのクラブカバーがあれば、欲しいんですよね。一番インパクトがありそうじゃないですか。

◆大江香織（おおえ・かおり）1990年4月5日、山形市生まれ。22歳。宮城・東北高を経て2009年のプロテストに一発合格。11年、賞金ランク43位に入り初のシード獲得。今年4月のフジサンケイレディスでツアー初優勝。週1回は秋葉原に出没。700冊以上の漫画を所有し、遠征中もDVDなどが必需品だ。声優の中村悠一が憧れというのは、ゴルフ界では有名。家族は両親と兄。

アスリートが語る 2 まどか☆マギカ

長島☆自演乙☆雄一郎さん（格闘家）

ほかのアニメと異なるのは、平気でキャラクターを殺してしまうところ。キャラクターが救われず、全員がハッピーエンドにならない。

マミさんは強いんだということを訴えたかったけれど蝶野にSTF決められて負けた

アニメは200作以上見てきました。もちろん、「まどか☆マギカ」も全部見ました。1、2話はあまり面白いと思わなかったので見るのをやめようとしたのですが、「3話だけは見ろ」というネットユーザーがいたので見てみると、案の定、取り込まれました。

ほかのアニメと異なるのは、平気でキャラクターを殺してしまうところ。キャラクターが救われず、全員がハッピーエンドにならない。特にマミさんは主要キャラだと思ったので、いい意味で裏切られました。さやかは思い人のために魔法少女になったのに報われない。普通だったら最終話で報われるのに。次は何が起こるのだろうと思い、一気に見ようという気になりました。

それ以外にも、ちょっと分からない世界観というのがあって、うまいこととあおられました。流れがすごいよくて、うまいこと引き込まれましたね。パート、パートで面白さがあるので、最終話はどういう終わり方になるのだろうというふうになりました。

好きなキャラクターは性格ではほむら、顔でいうとまどかがかわいいなあ。さやかは好きな人にのめりこめるほど献身的で、自己犠牲ができる。キュゥべえはとんでもないヤツですね、あんなにかわいいのに。そのギャップにひきこまれましたよ。さやかは想い人のため、ほむらは友情のためと、キャラクターの立ち方に意味がある。それに、裏切りというか、歯がゆいというか。さやかは彼氏のことを思っているのに報われず、ほむらはずっとまどかのことを思っているのに、報われない。みんなの強い思いが自分にまで伝わってくる気がしました。

昨年8月、プロレスIGFのリングで蝶野正洋選手と対戦した時には、マミさんのコスチュームで入場しました。格闘技を盛り上げようとデビューからコスプレはやっていましたけれど、3戦目のときにアニメのコスチュームを見つけて、これは面白いと。自分もアニメ好きだったし、格闘技ファンに自分の好きなキャラクターを知ってほしい、アニメファンには格闘技を知ってほしいという思いをこめてコスプレで入場するようになりました。「まどか☆マギカ」はパラレルワールド。蝶野戦の前の会見では「このパラレルワールドの終わりを変えるんだ」と言いました。マミさんは強いんだということを訴えたかったけれど、STF（顔面を締め上げる蝶野の得意技）をきめられて負け。ボクの力では世界を変えることはできませんでした。アニメオタクの中では、マミさんのことを蝶野戦にからめていると言われました。まどかとマミさんのコスプレはやったので、いつかほむらのコスプレをやってみたいというのはありますね。でも、黒髪のロングはボクには似合わないので、さやかのほうが似合うかな。

「まどか☆マギカ」は映画になると思っていましたよ。テレビだけでは、いい意味で回収されていないところもあった。みんなネットでも言っていましたしね。その通りになったと思いました。売れると思います。映画は絶対に行きたいですね。続きが気になっていたところなので。どうつなげていくのか。違う世界のことを書くのか。映画でもいい裏切りを待っています。

◆長島☆自演乙☆雄一郎（ながしま・じえんおつ・ゆういちろう）1984年7月2日、兵庫・西宮市生まれ。28歳。2005年に総合格闘技、07年にはキックボクシングにデビュー。09年にK―1に参戦し、10年のワールドMAX70キロ級日本トーナメントで優勝。11年にはアシロードプロレスリングでプロレス初参戦を果たすなど、活動の幅を広げている。自他ともに認めるアニオタで、入場時のアニメのコスプレが定番となった。ミドルネームは自作自演おつかれさまの略。175センチ、70キロ。家族は妻。

©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Movie Project

テレビ版エンディングテーマ「Magia」歌う女性3人のボーカルユニット

Kalafinaインタビュー

劇場版後編主題歌「ひかりふる」24日発売

Magiaは挑戦した楽曲であり新境地へ足を踏み入れた楽曲

聴いてくれた方を一気に引き込む力が半端ない一曲です

—テレビ版の楽曲「Magia」はどんなイメージで歌った？

Wakana（以下W）「『Magia』は人の願いや思い、そして願いによって人は生かされているということを歌っています。少し怖いおとぎ話のような、せつなさも込めています」

Keiko（以下K）「人の心の中に潜む、強い願いや祈りという思いを訴えるように歌いました」

Hikaru（以下H）「旋律はあやしげでダークなサウンド、歌詞には強い願いを込めている楽曲です。底の見えない暗闇の中から渦巻く物が上がってくる絵だったり、手を伸ばし葛藤の中で心から願いを叫ぶ姿だったり…。自分にはそういうイメージが浮かんだ楽曲です」

—では劇場版の楽曲「ひかりふる」は？

W「『Magia』の強く願う思いに対して、『ひかりふる』は人の祈りを歌っています。優しく繊細なメロディーですが、歌詞に込められた強い思いを表現するために、情熱的に歌いました」

K「タイトルからイメージする通り、希望を感じていただけるように、温かく包み込むような気持ちで歌いました」

H「闇の中に光が差し込みじわじわと広がっていくイメージで、柔らかさの中にある強さを歌っている楽曲だと思っています。個人的に、今回は人のいろんな感情の中でも、〝切望〟をテーマに歌わせていただきました」

—このアニメの一番の魅力は？

W「今まで見たことのない、本当の魔法少女たちがここにはいます。それは、命がけの物語です」

K「想像をはるかに越えるストーリー展開、そして映像と音楽のハイクオリティー！。一番を一つに絞れませんでした（笑い）。それぐらい面白いんです〃。すごいんです〃。とにかく見てください〃」

H「物語の中に大人だからこそ心に響くメッセージもたくさん散りばめられていると思うので、ストーリーや言葉ひとつひとつに注目して見てみると面白いと思います！」

—自分にとっての「魔法少女まどか☆マギカ」とは？

W「正義のヒーローやヒロインにあこがれていたけど、願いがかなう、戦うということは、本当はすごく怖く、勇気がいることだと、現実を教えてくれたアニメです」

K「幼い頃憧れていた魔法少女への思いや夢を思い出させてくれたと同時に、大人になった今、理想と現実の世界を感じる中で改めて夢や勇気をもらった作品です」

H「たくさんの方々を魅了したアニメーションであり、自身も好きな〝魔法少女アニメ〟のイメージをいい意味で裏切られた作品です。そして『Magia』を生み出すという大事なきっかけをくれた作品です」

—もっとも印象深いシーンは？

W「戦闘シーンや異世界に迷い込むシーンの、はり絵のような不思議な世界観がとても印象的で大好きです。色とりどりで、怖いけどかわいらしくて、敵の魔女すら愛らしいと思ってしまいます」

K「ほむらが好きなので、ほむらのシーンはすべてお気に入りなんですが。ほむらがキュゥべえを殺して、その死んでしまったキュゥべえを、復活したキュゥべえが食べているシーン…。このシーンはなんだか印象的ですね、色々な意味で」

H「ほむらがまどかのために何度も同じ時を繰り返していることがわかるシーンは衝撃的で、でも心に刺さるものを感じられる場面でした。涙なしでは見られない、ハンカチ要準備のシーンです！」

—「Magia」リリース以降、ファンの反応に変化は？

W「『「Magia」はKalafinaにとって挑戦した楽曲であり、新境地へ足を踏み入れた楽曲でもあったと思います。そういう楽曲を、ライブに来てくれた皆さんが楽しみにしていてくれるのは、そういった意味ではKalafinaの可能性を広げてくれた楽曲だと思います」

K「少し質問の趣旨とずれてしまうかもしれないのですが、『Magia』を生で歌っている時にお客様を見ると、呼吸やまばたきをしていないんじゃないか、と思うぐらい真剣な表情をしていて、私達も、この曲のもつパワーみたいなものをその時に改めて感じました。聴いてくれた方を一気に引き込む力が半端ない一曲です」

H「楽曲がまたKalafinaの新たな一面を見せられるものだったので、たくさんの方々に新鮮さを感じて頂けたと思っています。この楽曲からKalafinaを知って下さった方もたくさんいらっしゃるので、そういった新しいつながりもうれしく思います」

—作品の中でなってみたいキャラクターは？

W「Kalafinaの衣装を、『まどか☆マギカ』のキャラクターに描いていただいたことがあって、そのさい私の衣装がマミさんだったので、マミさんです」

K「キュゥべえ」

H「あえて選ぶとしたらキュゥべえ。あの無表情から想像することがむずかしい頭の中は一体どんな思考を持っているのか、もしかして言葉を発していない時以外は〝無〟の状態なのか…。生態も気になりますし、謎だらけな分興味があります」

—もし、キュゥべえと出会ったなら？

W「私は…遠慮させていただきます（笑い）」

K「なる〃　願いごとは…そうなったら直感で決めたい」

H「できればキュゥべえと出会いたくないですね…。出会ってしまったら、この世界の見方が変わりそうなので。契約もしないと思います（苦笑）。今のままで精一杯生きたいです」↗

Kalafina 2008年1月23日、シングル「oblivious」でデビューした女性3人のボーカルユニット。11年9月にリリースしたサードアルバム「After Eden」はオリコンアルバムチャートで3位を記録した。11年2月16日には「魔法少女まどか☆マギカ」のエンディングテーマ「Magia」をリリース。12年には全国7か所10公演を行い約1万3000人を動員。10月24日に「劇場版魔法少女まどか☆マギカ〔後編〕永遠の物語」主題歌「ひかりふる」をリリース。メンバーは、伸びのある清涼感あふれる歌声のWakana、魅惑的な低音のKeiko、透明感と緊張感をあわせ持つHikaru。

テレビ版オープニングテーマ「コネクト」を歌う女子高生ユニット

ClariSインタビュー

劇場版前編主題歌「ルミナス」好評発売中

コネクトはほむらちゃんの気持ちを歌っていて

ルミナスはまどかちゃんの思いを歌った曲なのかな

—テレビシリーズの楽曲「コネクト」はどのようなイメージで歌った？

クララ「『魔法少女まどか☆マギカ』がどのようなお話なのか分からなかったので、友達の事や歌詞の情景を思い浮かべながら歌いました」

アリス「アップテンポの曲調だけど切ないメロディーだったので、『切なさ』が伝わる様にと思って歌いました」

—一方で劇場版の楽曲「ルミナス」は？

クララ「『コネクト』はテレビ版を見てほむらちゃんの気持ちを歌っているのかなと思ったのですが、『ルミナス』はまどかちゃんの思いを歌った曲なのかなと思い、まどかちゃんの気持ちが伝わるように歌いました」

アリス「テレビ版の最終回で感じたほむらちゃんをイメージして歌いました」

—アニメに縁のないおじさんに、このアニメの一番の魅力を

クララ「〝魔法少女〟と聞くとかわいらしいいイメージがあるかもしれませんが、『魔法少女まどか☆マギカ』は、ただ楽しいアニメではなく友達を大切に思う気持ちなど、ストーリーの中に色々なテーマが脚色され、私自身考えさせられるところがたくさんあったので、そういうところが魅力ではないかなと思います」

アリス「ふつうのアニメでは予想も出来ない展開におもしろみを感じます。色々な事で悩んだり、苦しんだりすると思いますが、この作品を見ると、私達の悩みや苦しみは小さな事に感じられます」

—自分にとっての「魔法少女まどか☆マギカ」とは？

クララ「とっても印象深い作品です。ただ見ていて楽しいだけの作品ではなく、友達を思う気持ちなどたくさんの事を学んだアニメだなと思います！」

アリス「たくさんの方に『ClariS』を知っていただくきっかけとなった作品です。素晴らしい作品に携われた事を幸せに思っています。感謝の気持ちで一杯です」

—もっとも印象深いシーンは？

クララ「ほむらちゃんがまどかちゃんの運命を変えるために同じ時を何回も繰り返していた事が分かった回です。そこで『コネクト』の歌詞の意味などが理解出来てとても感動しました」

アリス「第3話でマミさんが死んでしまったシーンです。他の魔法少女が助けにくるのだろうと思って見ていたのですが…。そのまま死んでしまうだなんて、あまりにも衝撃的でした。また、そのシーンの映像にも衝撃を受け鮮明に覚えています」

—「コネクト」のリリース後、ファンの反応は？

アリス「BBSに、『魔法少女まどか☆マギカ見て、ClariSを知りました…』や『コネクトを聴いてファンになりました…』などのコメントが寄せられていたのを見て、うれしく思いました」

クララ「その頃に東日本大震災があって、BBSで『コネクト聴いて頑張ってます！』などと書いてくださったりして、私達の歌がみな皆さんに届いているのだなととてもうれしく思い感動しました」

—なってみたいキャラクターは？

クララ「まどかちゃんです♪　まどかちゃんみたいに世界中のために自分を犠牲にしたり、とても尊敬するので、私もまどかちゃんのように強くなりたいなと思ったからです」

アリス「魔法少女の誰になっても悲しい展開なので…誰にもなりたくないです（涙）もしなるとするなら…まだ一番何も分からない、まどかちゃんの弟かなぁ（笑い）」

—もし、キュゥべえと出会ったら、契約して魔法少女になる？

クララ「今と変わらない毎日がきますように。または、私の大切な人たちが元気で過ごせますようにってお願いします」

アリス「アニメを全話見た今では契約したくないですが、もし何も知らなければ魔法少女になっちゃいますね〃　『東京ディズニーリゾートで歌えます様に☆彡』とお願いします」

—「スポーツ報知」を知っている？

クララ「聞いたことはあるのですが、読んだ事はありません。高校に入り野球の全校応援などをして、野球を見ることが好きになりました♪」

アリス「読んだことはないのですが、スポーツは好きで、特に（フリースタイルスキー）モーグルの上村愛子選手が好きです。メダル獲得のために、何度もオリンピックに挑戦している姿に感動します！」

—読者にメッセージを

クララ「『劇場版魔法少女まどか☆マギカ』といっしょに『ルミナス』も楽しんでいただけたらなと思います（＊´︶`＊）」

アリス「そして『ClariS』の名前を覚えていただけたらうれしいです♪」
応援よろしくお願い致します！

↗ —「スポーツ報知」を知っていた？

W「はい、知っています。掲載いただいた事もありますので、いつもお世話になっています。好きなスポーツは子供の頃新体操を習っていたので、新体操や体操を見るのは好きです。あと兄のバスケットボールの試合をよく見に行っていたので、NBAもよく見ていました」

K「もちろん、知っています。スポーツはサッカー、テニス、ゴルフ、自分でもやるので好きです。石川遼君が活躍されると注目しちゃいます♪」

H「『スポーツ報知』さん！もちろん存じております。スポーツは専ら見る側なのですが、新体操やフィギュアスケート等の美しさも重視される競技はつい見とれてしまいます」

—最後に読者にメッセージを。

W「私たちにとって、また新たな一面をお見せできる一曲が出来ました。Kalafinaのニューシングル『ひかりふる』を、ぜひ『劇場版　魔法少女まどか☆マギカ』にていち早く聴いていただけたらうれしく思います。皆さんが誰かのために祈る気持ちが、いつも輝いていますように」

K「こんにちはKalafinaのKeikoです。スポーツは絶対欠かせないぐらい私のライフスタイルの一部ですが、私たちが携わっているアニメーションも本当に夢中になるぐらいの面白さです！　いろいろな作品を通して、さまざまな世界観の楽曲を歌っていますので、ぜひKalafinaの音楽にも触れていただけたらうれしいです〃　スポーツの秋、音楽の秋、食欲の秋、目一杯楽しみたいですね…♪」

H「Kalafinaをご存知の方も、この記事で初めて知ってくださった方も最後まで読んでくださってありがとうございます。三者三様の歌声でさまざまな世界観を歌うヴォーカルユニットとして活動しています。この記事をきっかけにKalafinaの音楽にたくさん触れていただけると幸いです」

◆ClariS 女子高校生のクララとアリスによるユニット。2010年10月20日にシングル「irony」でメジャーデビュー。オリコン初登場7位。翌年2月2日、「魔法少女まどか☆マギカ」のオープニングテーマとなったセカンドシングル「コネクト」をリリース。こちらはオリコン初登場5位にランクインした。今年4月11日に発売されたファーストアルバム「BIRTHDAY」は、オリコンチャート初登場2位を記録するなど、10万枚を超える大ヒットとなった。10月10日には「劇場版魔法少女まどか☆マギカ〔前編〕始まりの物語」主題歌として、第5弾シングル「ルミナス」をリリースした。ユニット名にはラテン語で「明るい」「清潔」「輝かしい」などの意味がある。

©Magica Quartet／Aniplex・Madoka Movie Project